
ハンコくださいっ！

楽山やくら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハンコくさいっ！

【Nコード】

N3721Z

【作者名】

楽山やくら

【あらすじ】

それぞれ異なる理由から、魔符術学校を卒業できない危機に立たされているリユーイとロディナ。そんなふたりに校長先生が与えた最後のチャンスは、協力して『いちばん強い魔符術』をつくりだすこと！ しかし、正反対の性格を持つふたりは早々にケンカ別れをしてしまつて……！？ まっすぐな少女と捻くれた少女の友情×魔符術ファンタジー。

「ブローグ」癒しの大樹にて

セルミア魔符術学校の中庭には、なんの根拠もなく『癒しの大樹』と呼ばれている老木がある。

テストの点が悪かったり、通知表の評価が低かったり、先生から叱られたりしてかなしみのどん底にいる生徒たちが、一方的にその木に話しかけることによって、勝手にストレスを解消して去っていくんだ。

別に、木がなにかをしてくれるわけじゃない。

けれど、なぜか自然と足が向いてしまう。

学年順位では明らかに下から数えたほうが早いあたし——リユーイルンも、そういう生徒のひとりだった。

（常々やばいやばいとは言われてきたけど、まさか卒業までやばいなんて！）

まったく、自分で自分に呆れるよ……。

さつき先生から聞かされたばかりの衝撃的な事実に頭を抱えながら、あたしは今日も『癒しの大樹』へと向かっていた。

廊下を歩くその足取りがいつもよりずっと速かったのは、それが絶対にあつてはならないことだったからだ。

（これじゃあ、ギヒシー（パパ）とバートチャ（ママ）が帰ってきても顔向けできないよ〜）

あたしの両親は高名な言語学者だった。しかも専攻は、古代語。

それははるか昔に使われていた言語で、魔力のない者が魔術を行使するための『魔符』をつくるには欠かせない要素だった。当然このセルミア魔符術学校でも、いちばん力を入れて教えられていた。

そしてやっぱり当然、古代語の専門家を両親に持つあたしは期待され。

その期待を——ことごとく裏切りつつけてきたんだ。

（単語力だけなら誰にも負けないのに……！）

赤ちゃんの頃から、なにか言葉を覚えるときは現代語と古代語をセットで覚えさせられてきた。両親を呼ぶときも古代語で呼んでいくくらいだ。だからあたしは、他の人がまったく知らないような、どうでもいい単語までたくさん覚えていた。

おそらく、きつと、それらがあたしの脳みそのほとんどを占めてしまっているんだろう。

この学校に入ってから教えられた古代語の文法は、少しも頭の中に入っていないで、あたしはうまく文章を組み立てることができなかった。テストのときには毎回、単語問題の点数しか取れなかった。

（情けなかった）

両親が単語しか教えてくれなかったからなんて、理由にならない。ちょうど文法を教えはじめようとしていたその頃、急にいなくなってしまったなんて――

「……あつ、ごめんなさい！」

早足で歩いていくように考えていたせいで、他の生徒とぶつかってしまった。立ちどまったあたしが慌てて謝ると、

「ぼーっとしながら歩くなよ、バーカ」

男子生徒はそう罵倒して、あたしの横をすり抜けていく。

（――ほんと、バカだな）

そのあいだにも脳裏に浮かぶのは、両親のやさしい笑顔。その目尻が少しずつりあがっていくのを想像して、あたしはぶんぶん頭を振った。後頭部に高く結っている髪の毛も、一緒に揺れて否定する。

（ダメっ、たとえ頭のなかでだってこんな顔させられない！ なんとかしなきゃ――）

焦燥感があたしの心を支配して、再び歩きはじめた。中庭への出入り口はもうすぐそこだ。

（なんとかして、卒業しないと！）

必死の思いで、足を動かす。

そこに行けば、きっと落ちつける。

そうしたらなにか、妙案が浮かぶかもしれない。

あたしは期待していた。

常連の仲間がいたら相談してみようなんて、考えてもいた。

けれどその日、強い風にあおられ緑の葉が舞い飛ぶなか、さらりと長い黒髪をなびかせて立っていたのは――絶対にそこにいるはずのない人物だった。

「！ あ、あなたは……」

発見したとき、息を呑んだ。あたしはそれ以上言葉を続けられない。

それが誰なのかは、知っていた。

彼女は学校始まって以来の天才として有名だったから。

それに、あたしと彼女はある理由で周りから勝手な比較をされていたんだ。

あたしは、『成績が悪いほうのルーン』と。

そして彼女は、『成績が良いほうのルーン』と。

そう、彼女の名はロディナ・ルーン。

名字が同じだけの、赤の他人だ。

当然お互い存在は認識していたけど、まだ直接話をしたことはなかった。

（なんで彼女がここに！？）

天才なら、こんな場所に用事なんかないはずだ。まさか、からかいにでも来たの？

あたしはかける言葉を見つけれなかった。思いがけないロディナの登場に動揺し、見つめるのが精一杯。

そしてそんなあたしを、ロディナも見つめ返してくるだけだった。向こうから話し出す様子もない。

（変なの……でも、やっぱり美人だな）

こんな状況下なのに、あたしはつい見とれてしまう。

そう、ロディナが有名だったのは、なにも頭が良いからだけじゃ

なかった。あたしとは違って、切れ長の大人っぽい目に、形の良い上品な鼻、柔らかそうな厚い唇。おまけに、制服のスカートからスラリと伸びた長い脚が、まるであたしと年齢差があるかのように見せていたけど、安易に比較されるところからもわかるとおり、あたしとロディナは同じ十六歳だった。

あたしは密かに、彼女に憧れていた。

だからこそ簡単には、言葉が続けられなかったんだ。

「——あ、あのっ」

それでもなんとか選び出し、自分が焦っていたことも忘れて、あたしは口を動かす。

「ここに来るってことは、もしかして、なにか嫌なことでもあったの？」

（成績では用のない彼女でも、それ以外のことでなら）

なにかつらいことがあったのかもしれない。

そう思っただけで訊いてみたけど、ロディナは相変わらずあたしを見返すだけで、息を吸う素振りも見せない。それどころかやがて、すいと顔を背けて幹のほうを向いてしまった。

（あれえ？）

その背中が、すべての問いを拒絶しているように見えた。

（なにか悪いこと訊いちゃったかな……）

予想外の反応に、戸惑ったあたしはそっと手を握りこむ。

もし悩みがあるのなら、誰かに話すだけでもすつきりすることがあるんだ。それは相手が木であつても有効なことだけど、人間であれば当然もつと効果が高いもの。あたしはこれまでそうやって何度も、仲間に助けられてきた。

励まされてきた。

（でもロディナは、ひとりのほうがいいのかな）

ひとりになりたくて、ここに来たのかな。

それなら——

（常連のあたしが、譲ってあげなくちゃ）

ロディナがここを訪れるのは、これが最初で最後になるのかもしない。それなら、情けないことに今後もお世話になりそうなあたしが、今無理に邪魔することもないんだ。

まだ動かないロディナの背中に、決心したあたしは足を動かそうとした。

——そのときだった。

「リユーイ！ やっぱここにいたかつ」

突然の声に振り返ると、校舎の出入り口から走ってくる人影があった。

「げっ、ジノラット」

シルエツトだけでも簡単に誰だかわかりそうなツンツン頭のそいつは、あたしの幼なじみ・ジノラット「ダクシャン。あまりにもやんちゃが過ぎて、いつも身体のどこかに包帯を巻いている。本人は「ファツシヨンだ！」と言い張っているけど、絶対に違うとあたしは思っていた。

「『げっ』ってなんだよ『げっ』って」

今日は左の二の腕のあたりに包帯を巻いているジノラットが、あたしから一步離れた位置でとまると、まずはあいさつがわりの口ゲンカ。

「だって、あんたが来ると話が長くなるんだもの」

「なんだとー？ それはおまえが話をややこしく——」

でもそれがあっさり途中で終わったのは、ジノラットの視線があたしを通り越したからだった。

（？ …… ああ、後ろのロディナに気づいたのね）

さっきのあたしみたいに、ジノラットも見事に固まっている。ついでに頭の前からどんどん赤くなっていって、やがて口をパクパクはじめた。

（まったく、ジノラットだったらわかりやすいんだから）

そう、ジノラットはあたしとはまた違う意味で、ロディナに憧れていた。

「な、な、な、なんで……なんでっ、ロディナがここにいるんだよ！？」

「あたしに訊かないでよ。それよりどう？ 『覗き屋ジノラット』くん。双眼鏡じゃなくて裸眼でロディナを見た感想は！」

「うわああ、なに言っちゃってんだよっ、聞こえる聞こえる！！」
焦ったジノラットは、素早い動作であたしと身体を入れ替えると、通せんぼするように両手を広げた。もしロディナが振り返っても、常に首から提げている双眼鏡を見られないようにしたかったんだろ
う。

「あたしのこと、いつも『成績が悪いほう』ってバカにしてくれるから、お返しよ！」

「く……っ」

あたしが両足を広げ胸を張って告げると、ジノラットは文句を言いたそうに眉をひそめたけど、それでも後ろにロディナがいるからなのか、口をひらくことはなかった。

（よしっ、今日は早く切りあげられそう）

あたしは心のなかでほっと息をつく。なにしろ、こんなところで時間を使っている場合ではないんだ。『癒しの大樹』をロディナに貸している以上、他に落ちつける場所を探す必要があった。

「で？ あたしになんの用？」

「あ、そうだった！」

促してみると、ジノラットはぽんと手を叩く。

「俺、一応おまえに良い話持ってきたんだぞ……なんか癪だけど、まあいつか」

そう前置きしてから。

「卒業が危ういおまえに朗報だ！ なんでも、国王陛下が『いちばん強い魔符術』を欲しがっているらしい。それをつくれたら、願いごとをひとつ叶えてくれるってよ！」

「えっ！？」

「——それ、本当？」

(！)

驚きの声をあげたのはあたし。でもそれに続けたのは、意外にもロディナだった。

太い幹の前で、ロディナはいつの間にかこちらを向いていて——その瞳は、息を呑むほどに真剣そのものだ。

「あ、あの……？」

それだけ返すので精一杯なジノラットの声は、乾いてガラガラだ。ロディナはその返答に不満だったのか、ツカツカとジノラットに近づきその両肩をつかまえると。

「その話は本当かと訊いているの。どうなの？」

「は、はいっ！ 本当ですっ。この学校からも挑戦者を募るって、さつき校長先生が城の人と一緒にポスターを貼ってましたっ！！」
骨のない人形のように首を振りながら、ところどころ豪快に声をひっくり返らせながら、ジノラットは一生懸命に答えた。

「そう——」

それを聞いたロディナは一言呟くと、そのままぐいとジノラットを押しつけて、校舎のなかへと走っていつてしまう。

(どこか様子が変だわ)

そこにいたさつきまでは、むしろ落ちつきすぎるほどだったのに。
(やっぱりなにかあったの？)

心配になったあたしは、ロディナを追いかけてようと地面を蹴った。
「あつ、リユーイ！？」

すると押し倒されて地面に座りこんでいたジノラットが声をかけてきたから、一瞬だけ立ちどまって。

「校長室よ！」

「来る気があるなら来なさい」という意味をこめて、言葉の置き土産を投げてから再び走り出す。

(そう、きつと校長室。だってロディナ、さつきの話に興味がありそうだったもの！)

国王陛下が願いを叶えてくれるという、まるでおとぎ話のような

話に。卒業がかかっているあたし以上の興味を持って、ロディナは食いついていた。

（なにか叶えたいことがあるの？）

だから、『癒しの大樹』に来ていた？

ロディナほどの人物が、一体なにを望む？

あたしは気になった。

半分くらいは羨望で、半分くらいは僻みだったかもしれない。

授業が終わってからしばらく経っているため、ほとんど人の気配のない校舎のなかを、ばたばたと駆け抜ける。そのたびに床板はひどく軋み、建物全体が少し揺れたけど気にしない。築百年の木造校舎を心配するよりも、ロディナの秘密（？）が知りたかった。

いつも比べられてきた。

いつも、憧れていた。

ああなりたいと思っていた。

そんな相手が、心に抱える悩みつてなに……？

目的の校長室は、校舎のいちばん奥にある。たどり着いた頃には息が切れていた。

「——校長先生！」

それでもそのまま校長室に飛びこむと、そこにはやはりロディナの姿があった。

あたしを振り返ったロディナは、大きく目を見ひらいていて。それとは対照的に、校長先生は変わらず穏やかな笑顔を浮かべていた。ふんと、大人の男性がよく使う整髪料のにおいが漂う校長室内に、校長先生の低い声音がやさしく響く。

「リユーイさん、あなたもこの話に興味があるのですかな？」

「えっ！？ あ、はい、まあ……」

『この話』が、さつきジノラットが言っていた話だとあたりをつけたあたしは、戸惑いながらも頷く。もともとあたしの卒業のためにジノラットが持ってきた話だったんだ、興味がないわけがない。

（どんな成績でもいい、とりあえず卒業だけでも！）

できる可能性があるならば、あたしはすがりたかった。

自分はどんなにバカにされてもいいけど、両親だけはバカにされたくなかったから――。

そんな想いのあたしと、啞然とした表情のまま固まっているロディナを、交互に見つめた校長先生は、やがて「いいでしょう」と深く頷いて。

「国王陛下が求めている『いちばん強い魔符術』。きみたちふたりで力を合わせてつくってみなさい」

「!？」

当然顔を見あわせる、あたしとロディナ。

「発表大会までは七日間あります。そのあいだに完成させるのです。出場の申しこみは私のほうでおきましょう。ただし、これも課外授業の一環ですから、制服で行動するようにしてくださいね」

すらすらと続ける校長先生に、耐えかねたのかロディナが口を挟んだ。

「待つてください校長先生！　ひとりずつではダメなのですか？」

校長先生のすべてを包みこむような視線が、再びあたしたちをとらえる。

それからこりと、目尻にシワを寄せて。

「ルーン同士です、きっと仲良くできますよ」

――なんの根拠もないのは、『癒しの大樹』だけではなかった。

【第1章】それぞれの理由 - 1

丸襟がかわいいまっ白なブラウスに、映える真紅のリボン。そして青が基調のタータンチェック・プリーツスカート。

（着てる制服は同じなのに、なんでこんなに違うのかなあ）

学校から西に延びる、林に囲まれた国道をふたり並んで歩きながら、あたしはそんなことを考えていた。

（ジノラットじゃないけど、遠目に見る分には良かったのよ）

でも隣に立たれると、外に向いていた憧れや羨ましが、内に向いた落胆や恥ずかしさに変わってしまう。

それでもさいわいだったのは、ロディナの中身が見た目ほど完成されていないこと。

そう、ロディナはまだ一言も、あたしと口をきいていなかった。

あたしがなにを言っても、だんまりを決めこんでいたんだ。

（性格が悪いなんて噂、聞いたことなかったんだけどな）

もしかしてロディナ、あたしのことが嫌いなのかな……？

無表情に覆われた横顔を見ながら、あたしは少し沈みこむ。

卒業できるチャンスをもらえたことも、密かに憧れていたロディナと一緒に挑戦できることも、あたしにとっては嬉しいことなのに、でもロディナに嫌われたまま進むとなると、話はまったく別だ。

雲のほとんど見えない空は高く、昨日よりも幾分落ちついた風が、あたしたちのあいだをすり抜けていく。あたしの視線は何度もそこを行き来してしまうけど、ロディナの視線は相変わらずまっすぐに前をとらえたままだった。

道の両脇に伸びている木々を？

それとも、これから先に待っている想像もできない未来を？

「——なに」

「えっ？」

不意に、初めてロディナが唇を動かした。

「さつきからわたしのほうを、チラチラ見てるでしょ」

さすがに気づいていたんだ。そして居心地の悪さを感じたんだろ
う。

その声は低く、あからさまに機嫌の悪さが窺えたけど、あたしは
チャンスだと思ってロディナの前に躍り出る。

「う、うん！ これからどうしたらいいかなって、相談しようと思
って」

集合場所も集合時間も、校長先生が勝手に決めて、あたしたちは
それに従っただけだった。今西に向かつて歩いているのだって、な
にか目的があつてのことじゃない。たまたま見送られたのが西門だ
ったからだ。

あたしに行く手を遮られ、ロディナは歩く足をとめた。目を細め
て、もう一度あたしの顔をとらえる。

「じゃあ訊くけど、リユーイルーン。『いちばん強い魔符術』に
は、なにが必要だと思う？」

「え？ っと……」

突然の問いに、あたしは言葉を詰まらせた。

それをつくらねばならないことになって、あたしだって昨日から
ずっと考えてはいたんだ。

（そもそも魔符って、魔力に命令を与えて自在に操作するためのも
の、なのよね）

学校で習った歴史によると、昔々の古代人は誰もがあたりまえに
魔力を持っていて、魔術は決して不思議なものではなかったという。
でも時代が進むにつれ魔力を持つ人が減っていった、魔力を持たな
い人でも魔術を使えるようにするために、魔符が生まれたんだって。
魔符に魔力への命令を織りこみ、魔力を持つ人——『魔力士』のハ
ンコをもらうことで、そのハンコから繋がっている魔力士の魔力を
借りて魔術を発生させるのが、魔符術の仕組みなんだ。

そして今現在、魔力士はこのアステイス王国内でも五人しかない
い。でも魔符術そのものは、国中はおろか世界中に広く浸透してし

まっていたんだ。今さら魔符術のない不便な生活には戻れないって、各国は魔符をつくる技術を保存する試みを始めた。そのなかのひとつが、あたしたちの通うセルミア魔符術学校というわけ。

（だから、強い魔符術をつくるためには――）

まとめてきた考えを、少しずつ引き出しながらあたしは口をひらいた。

「魔力がすごく強い攻撃をしてくれるように、強力で正しい命令文を構築することと、すごく強い力を持った魔力士にハンコをもらうこと！　じゃないかな？」

あたしの、自分でもそうとわかるほどつたない言葉に、ロディナは口もとだけで「ふっ」と笑い。

「そうね、『優れた魔符』と『優れた魔力士』が必要ね」

それ以上ないくらい短い言葉でまとめてくれた。

思わずあたしは「ぐう」と唸る。

（さ、さすが文章構築の天才っ！）

現代語も完璧だわ！

魔符は通常、古代人が使っていた古代語で書かれる。魔符に古代語で命令文を書きこむことを専門用語で『織る』といい、古代語に精通していなければ思いどおりの魔符を織ることはできない。さらに、魔符の発動には魔力士のハンコをもらったあとでそれを読みあげるという行為も加わるんだ。つまり古代語を正しく読む力も必要で、「魔符術は難易度が高く技術の保存が難しい」と言われる所以はそこにあつた。

学校一の天才と言われるロディナは特に、その古代語による文章構築能力に長けていた。それは実のところ、現代語の文章構築とはなんの関わりもないことなんだけど、あたしにとっては『すごい』ことにかわりなくって、感心してしまったのだった。

「『優れた魔力士』はねっ、このまま西にまっすぐ行くと、『国一の魔力士』って言われてるガイト＝チャードのお屋敷に着くの！　そこがいいんじゃないかしら」

ロディナの冷たい雰囲気にもめげず、校長先生から預かってきた『アステイス王国魔力士マップ』をひらきながら、あたしは提案する。そのマップには、国内に存在する五人の魔力士の現在地が記されていた。ついでに。×がついているのも気になるけど、意味がわからないから今はおいておこう。

ロディナはこのマップがすでに頭のなかに入っているのか、こちらに目を向けることもなくすぐに切り返す。

「ガイト」チャードのところまで、六マスもあるでしょ。歩いていたら一マス一日、往復で十二日もかかるじゃない。乗りものだってそうそう乗れるお金があるわけじゃないわ。宿泊代と違って学校からは補助が出ないしね。なに？ あなた、もしかして最初から諦めてるの？」

最初に世界地図をつくった人が、一日で歩いた距離の二乗が一マス。この世界ではどこでもそれが基準になっていて、マス目の境は視覚的にもわかるようになってる。あたしたちのやや前方にもひとつ、淡い光で区切られたような境目が見えていた。

「ち、違うよっ、ちゃんと考えがあるから！」

焦ったあたしは、マップをロディナのほうに向けて無理やり見せてやる。

「ほらここ！ 三マス先にもエイラ」ポットっていう魔力士がいるのよ。この人に、三マス移動できる魔符にハンコを捺してもらえば、歩きでも往復六日で行けるでしょ！？」

「その魔符は誰が書くのよ」

「それはもちろん、ロディナが……」

「自分が」と言いたいところだったけど、あたしにそこまで高度な魔符を織る技術はない。だからこそ案だけでも出そうと、昨日から必死に考えていたんだ。

マップからふいと顔を背けたロディナは、大袈裟でわざとらしいため息をひとつつき。

「——まあいいわ。それ以外にも気になることはあるけど、他に方

法があるわけではないし」

よけいに気になる言葉を吐き出してから、あたしの横を通って再び歩きはじめる。

（うう、ロディナったらちよつといじわるだわ……）

でも、頼りになるのも頼りにするしかないのも事実で。あたしはすぐにその背中を追いかけていった。

（せめてこの、ぎくしゃくした空気だけでもなんとかならないかしら？）

あたしは盛りあげるのが得意なほうだけど、ここまで相手のノリが悪いとそれも難しかった。もしここにジノラットがいてくれたら、もう少しマシだったかなあ？——ううん、むしろ泥沼になりそうだわ。やっぱりいなくて良かった。

あたしがひとり思案するあいだにも、ロディナは会話など不要とばかりにどんどん歩いていく。

「ねえ、待つてよロディナ！ 急ぎすぎよ」

後ろを歩きながら声をかけてみても、足をゆるめる気配はない。

「そんなに急がなくても大丈夫よ。だって『優れた魔符』のほうはできたも同然じゃない？ 学校一の天才・ロディナ＝ルーンがいるんだもの！」

あたしが本気で期待して告げたら、今度はぴたりと足をとめたロディナ。くるりと鋭い動きでこちらを振り返ると、再び自分から口を動かした。

「わたしは、書かないわよ」

「——え？」

あたしがその言葉の意味を一瞬理解できなかったのは、なんだかんだ言ってもロディナ自身も本気で『いちばん強い魔符術』をつくらうとしてくれるだろうと、思っていたからだ。あたしが卒業をかけているように、おそらくロディナもなにかをかけている。だからこそ態度は頑なでも、協力はしてくれるだろうって。

（ロディナの魔符が、いちばんの近道だと思ったのに……）

勝手な期待ではあったけど、拒否されたのはショックだった。

「書いて、くれないの？」

自然と声も震える。

そんなあたしの様子にはさすがのロディナも表情を崩し、もてあましていた腕を組んで。

「協力しないとは言っていないわ。ただ、魔符はあなたが書いて。わたしが読みあげるから」

「へ？」

また妙なことを言い出す。

「あなたが読んだのを、あたしが織るの？　なんでそんな面倒なこと……」

正確に書き取るためには、正確なつづりを知っている必要がある。単語ならわかるけど語尾変換などに自信のないあたしに、それができるとはとも思えなかった。まして、ロディナの知識レベルのほうかはるかに上なんだ、書き取るにしても時間がかかるだろう。それよりなら、ロディナが自分で書きこんだほうがはるかに早い。

あたしはつい、疑問全開の瞳でロディナを見つめてしまった。

するとロディナは、

「じゃああなた、この魔符が読める？」

肩から斜めにさげた魔符専用のファイルブックから、一枚の魔符を取り出してあたしに渡してきた。

戸惑いながらもおとなしく受け取って、それに目を落とすと。

（えっ！？）

そのまま凍ってしまったのは、そこにまったく知らない言語が書かれていたからだ。

少なくともあたしには、そういうふうに見えた。

「——これ、古代語？」

「アオマ・シャオアラビコオスモライフレ（魔符・術炎よ、ささやかなる光であたりを照らせ）」

「！」

それは日常生活のなかで、最もよく使われる魔符だ。ランプに灯りをつけるときはもちろんだけど、料理をするさいの火種としても使われる。それくらい一般的な魔符術だった。

あたしはもう一度、手のなかに視線を落とす。その命令文が書かれていると思つて見れば、かろつじてそう読めなくもないような気がしなくもない。

けど――

「あの……」

「わかつたでしょ？ 恥ずかしい話だけれど、わたし、字がとても下手なの。だからあなたが書いてよ。じゃないと、魔力士たちだつて読めないわ」

少しだけ目を伏せて、ばつが悪そうにロディナは口にする。でもそれは、あたしにとつてはたいした問題ではなかった。

だからつい、言つてしまったんだ。

「なあんだ、そんなことね。気にしなくたっていいのに」

字が下手でも、ロディナの頭脳が優れていることにかわりはない。それに、魔符がちゃんと発動するなら字の上手い下手なんて、言つてしまえばどうでもいいことだ。

あたしは心からそう思つていた。

それでも羨ましいって。

――ロディナの手が素早く伸びて、あたしの手もとにあつた魔符を掴んだ。

「そんなこと！？ そうね、あなたにとっては些細なことかもしれないわね。でもわたしにとっては、この世の終わりかと思うくらい大問題なのよ……っ！！」

「キツ」と至近距離であたしを睨みつけてから、方向転換したロディナは走り出す。まるで昨日と同じ場面をくり返しているようだった。

ただ、昨日と違うのは――

「ロディナ、待って！」

（怒らせちゃった！？）

これまでは、無表情だったり機嫌が悪かったりしたものの、ひとつの感情をここまであらわにしたことはなかったロディナ。それが、今は明らかに『怒っている』とわかるほどの強い瞳を見せつけてきたんだ。

思ってもみなかった反応に、あたしもどこか混乱してすぐには動き出せなかった。

（ロディナ……）

もしかしたら、ラブレターの字が下手だったって原因で、振られたりしたのかしら？

そんな相手ならこっちから振ってやればいいのにと、あたしが勝手な妄想まで膨らませていると。

「――ふたりのルーン、たった一マスも持たずにケンカ別れ、か」

また昨日をくり返すかのように、突然後ろから聞こえたなじみのある声に、あたしは反射的に振り向いた。

「ジノラット！？ あんた、いつから見えたのよ？」

今日は左手首に包帯を巻いているジノラット。林の陰に隠れて見ていたのか、ニヤニヤ笑いを口もとに浮かべ、双眼鏡に手をあてて立っていた。

「まあこうなると思ったよ。おまえとロディナじゃタイプが違いすぎるもんなあ。ロディナが耐えきれないわけだよ」

わかったふうな口ぶりで話すジノラットに、あたしはだんだんと腹が立ってきて。

「うるさい！ なによ、字が下手くらいどうってことないじゃない。頭良いんだから、それくらいご愛敬でしょ！ あたしなんて、あたしなんて……」

しまいには泣きなくなってきた。

（たとえ古代文字がうまく書いても、頭が悪かったら意味ないのよ
おおおっ……！）

幼なじみにでもそんなに情けないところは見せられないと、あた

しは心のなかでだけ続きを叫んだ。

そんなあたしを見るジノラットの目が、なぜかキラリと光る。

「なんだおまえ、地雷、踏んじやったのか」

それから不意に表情を硬くして、目を細めた。

なんの話だか、あたしには全然わからない。

「地雷？ 踏んでないよ、踏んでたらとつくに死んでるでしょ？」

だいいち、この国に地雷なんて……」

「いやいやいやいや、本物の地雷じゃなくてさ。ロディナの感情が爆発するようなこと、言っちゃったんだな」

「なに？」

ジノラットがなにを言いたいのか、やっぱりよくわからなかった。ただジノラットは、いつも覗いている分ロディナのことに詳しいはずだったから、あたしは身体をまっすぐに向けてジノラットの続きを待つ。

ジノラットも、真似をするように姿勢を正してから。

「成績上位五名は、魔符術協会に卒業論文を提出しなきゃならないって、知ってるだろ？」

「うん」

そしてそれが認められないと、卒業できないということも知っていた。セルミア魔符術学校の卒業生代表として、それくらいの責任があるんだ。

「それがどうしたの？」

軽く訊いてしまったあたしは、

「ロディナの論文、『字が汚くて読めない』って理由で突っ返されたんだったさ」

その答えに後悔した。

「え——」

（だから……だから昨日、あんなに焦ってたんだ）

卒業できないかもしれないことに、強いショックを受けていたあたしと同じで。天才と呼ばれるロディナですら、なんの根拠もない

『癒しの大樹』にすがらねばならなかった。すがりたかった。

それくらい、追いつめられていたんだ。

「でも、そんなのおかしいよ。ロディナの字は汚いんじゃないって下手なんですよ？　きれいに書いたって下手なものは下手じゃない？」

「……おいリユーイ。それがフォローだってのはわかるけど、話がこじれるからロディナの前では言うなよ？」

「なによー、事情通な振りしちゃって。わかってるけどさ、だって内容は間違いなく素晴らしいはずなのに、かわいそうじゃない」

「だから今回のことで、国王に認められて論文を受け入れてもらうようにお願いするつもりなんじゃないのか？」

「あ、そっか」

内容に絶対の自信があるならば、願うのは卒業そのものではなく、論文の受理になるだろう。

（なんだ、ロディナだって充分に本気だったんだね）

『いちばん強い魔符術』を、絶対つくりだしたいと思ったからこそ、あたしに魔符を織ってほしいと願ったんだ。それなのにあたしは、深く考えないまま応え、ロディナを怒らせてしまっ——

「——うん、あたし、ロディナを捜して謝ってくるよ」

あたしたちに残された時間は、たったの七日間。それを有効活用するためにも、早めに関係を修復しておく必要があった。

「居場所はわかるのか？　なんなら俺がこの双眼鏡で捜して——」

「いいよ、自分で捜すから。距離的に考えたら、隣のマスの宿に泊まるしかないしね。片っ端から捜してみる！」

「そ、そうか」

おそらくジノラットは、なにか理由をつけてついでにこうとしてるんだ。でもそれに甘えるのは、きつと得策じゃない。

（あたしが自分で見つけなきゃ）

そうして謝らなければ、その謝罪に意味などないように思えた。「ありがと、ジノラット。あんたもたまには役に立つのね」

そんな言葉を残して、今度こそあたしは走り出す。

「『たまには』はよけいだ！」

後ろから届いた声は、しかし少しも怒っているふうではなかった。

【第1章】それぞれの理由 - 2

結局あたしがロディナを発見できたのは、日付が変わる寸前のことだった。

しかもロディナはなぜか酒場にいて、顔をまっ赤にしながら大量の酒をあり、くだを巻いていたのだった。

「どーせわたしは字が下手ですよおお。だからってなによ、いい大人がそれを理由に突っ返さなくともいいじゃない！？ それくらい根性で読みなさいよ！ 学校の先生たちはみんな頑張って読んでくれているのよおおおっ」

「ロディナ……なにしちゃってるのよ……」

そのあまりの惨状に、あたしは言葉を失う。

ロディナの周囲ではたくさんの大人たち——やはり男性が多い——が無責任に盛りあがっているけど、ロディナ自身はずっと泣いていたのだろう、その目蓋はなかにものが入っているのかと錯覚するほどに腫れていた。

「お嬢さん、彼女の友だちかい？」

入り口で棒立ちになっていたあたしに、声をかけてきたのはエプロンをしたひとりの男性、どうやらこの酒場のマスターらしかった。もともと垂れているのだろう目をさらに垂らして。

「だいぶ前からあんな調子なんだ。部屋は二階に用意してあるから、良かったら連れていってくれないかな」

「えっと……あたしも泊まっていいいんですか？」

「もちろん。請求は学校のほうにあげればいいんだろ？」

「あ、はい。そうです」

セルミア魔符術学校は国の機関であり、その在校生はいずれ国の未来を担う存在になる。そういう認識が国内に広く伝わっているため、制服で行動している限りはその恩恵を受けることができた。あたしたちが制服で行動していたのは校長先生に指示されたからだっ

たけど、それにはちゃんとした理由があったんだ。

お酒のにおいが充満した薄暗い店内を、あたしは一步一步ロディナへと近づいていく。

「お？ またまた制服の女の子が来たぞ。いやあかわいいねえ」

そのあいだにも酔っぱらいが絡んでくるけど、無視をして進んだ。当然のことだけど、あたしは酔っぱらいの扱いになんて慣れていない。ただ、絡まれると先が長いらしいことは、たまに酒を飲んでいたギヒシー（パパ）の姿を思い出せばわかった。

「おいおい、無視しちゃうのかい、ねーちゃん？ こっちの子は気持ちよく騒いでくれるのになあ」

ロディナの近くに座っている男が、気分が悪いのか伏せているロディナの肩に手を置いた。

「！ ロディナに気安く触れないでっ」

あたしは慌てて残りの距離をつめると、男の手を払いのけロディナの上半身を起こしてやる。

「ロディナ、しっかりして！ ほら、上で休もうよ」

「うーん、もう食べられな〜い……」

「なに言ってるのよ、ほら！」

仕方なく、ロディナの腕を無理やり自分の首の後ろにまわして、立たせてやった。

（ロディナがこんなになるなんて……）

普段のロディナは、おいそれと人を近づけないような雰囲気を持っていた。こんなふうに酔っぱらいに気軽に触らせることなんて、考えられないんだ。

（よっぽど傷ついているのね）

『天才だから』

『頭が良いから』

自分たちとは違うのだと、心のどこかで考えていたあたしは。それが間違いであったことを、今、強く感じていた。

「歩いて、ロディナ。さすがにあたしだけの力じゃ、上まで連れて

いけないからっ」

支えながら身体を揺すって、ロディナを起こそうと試みる。

(あら……?)

そのときあたしは、ロディナが左手になにかを握っていることに気づいた。細い鎖がこぶしから垂れているところを見るに、ペンダントだろうか？

やがてロディナは、その握りしめた手をそのまま上にあげ、甲でこしこし目をこすると。

「——あれ？ リューイルン……なぜあなたがここに……？」

まだ頭はぼやけているようだけど、意識は少しはつきりしてきたみたいで、やっと自分でも足を動かしてくれた。

「話は部屋に行ってからよ。ほら、歩く歩く！」

あたしは必死にロディナを酒場から連れ出そうとする。

でもそこに、

「待てやねーちゃんたち、夜はこれから長いんだぜ？ もう部屋に行っちまうのかよ」

「そーだそーだ！ 酒場には華が必要だ！」

ロディナの退場を残念がる酔っぱらいたちが、容赦なく邪魔をししてきた。

「あ、こら！ ロディナ、お酒受け取らないのっ。置いてって！」

「うっーん」

「唸ってもダメ！」

ぐいぐい引っぱって、なんとかドアの前までたどりつく。

それでもまだしつこくロディナに絡んでくる酔っぱらいに、成り行きを見守っていたマスターが声をかけてくれた。

「そのへんにしておいたほうがいいですよ。彼女たちは、まだ勉強中とはいえ魔符を持っていますからね。我々が想像もつかないようなすごいものを隠し持っているかもしれないです。朝起きて大事なものが縮んでいたら、どうしますか？」

「うげっ!？」

実際にはそんな魔符あるはずもないんだけど、みんな酒が入っているためその言葉で静かになった。

（今のうちにっ）

あたしはマスターにペコリと頭を下げたあと、ロディナを引きずるようにして酒場を出る。このあたりは夜の街なのか、まだ灯りのついている店が多く、それほど暗さは感じなかった。でもだからこそ、長居するとまた酔っぱらいに絡まれる危険性がある。

あたしは急いで左右を見まわすと、この酒場と同じ建物の横から階段が跳び出しているのを発見した。

（あそこから入るのかなあ）

「ロディナ、もう少し歩いて。頑張って！」

「う……ん」

眠くて仕方ないのか、完全に身体を預けそうになるロディナをなんとか励まして、階段のほうに近づいていく。木製のそれが必要以上に軋ませながら段をあがっていき、やっと最後までのはりきった頃、その先のドアが勝手にひらいた。

（えっ？）

「ご苦労さん。悪かったね、手伝ってやれなくて」

顔を出したのは、さっきのマスターだった。

それからはロディナを部屋まで運ぶのを手伝ってくれて、やっとあたしはすべての荷物をおろすことができた。

「私が彼女を部屋に連れていこうとすると、見てのとおり酔っぱらいたちが散々に絡んでくるものだから、なかなか連れ出せなかったんだ」

「だからお嬢さんが来てくれて助かったよ」と、苦笑したマスターは部屋を出ていった。

（そっか、そうよね）

男の人がひとりで女の子を部屋まで送り届けるなんて、ロマンチックで怖い出来事だ。酔っぱらいたちにとっては格好のからかい草になってしまっただろう。

あたしはそこまで考えると、ベッドの上で気持ちよさそうに眠りはじめたロディナに目を向け。

「——良かった、無事で」
心から、呟いた。

（昨日までは、ほとんど赤の他人みたいな相手だったけど）

探ろうとして、ケンカして、弱みを見てしまつて。

自分が漠然と憧れていた存在とのギャップを感じて。

でもそれは幻滅の材料になるどころか、あたしが最初から見ようとしなかった、ロディナの人間らしい部分を見せてくれた。天才でも凡人でも、きっとみんな同じように悩んで、あがいているんだ。（あたしたちは決して敵じゃない、力をあわせて難題に立ち向かう仲間なんだから）

——明日から、やりなおそう。
最初から。

そう決意したあたしは、ベッドのなかへとめぐりこみ、意識を解放す準備をする。ロディナを捜して走りまわった一日だっただけに、眠りにつくのは早かった。

だから、

「……ヴァンさん……マリルゼさん……」

ロディナが寝言であたしの両親の名を呼んだような気がしたのも、夢か現実かわからなかった。

【第1章】それぞれの理由 - 3

いつも笑顔を浮かべ、すべてを受け入れるやさしさを持っていたギヒシー（パパ）・ヴァンディリス＝ルーン。

ときにはあたしを叱りつけ、善悪を厳しく教えこんでくれたバートチャ（ママ）・マリル＝ゼ＝ルーン。

それは、世界を代表する古代語の研究者であつたあたしの両親。古代語研究の未来を憂い、積極的にセルミア魔符術学校へとおもむき、生徒たちに古代語の奥深さと味わい深さを教えこんでいたという。

（あたしもちゃんと教わりたかつたな……）
思わずにはいられない。

あたしがふたりに古代語を教えてもらえたのは九歳までで、そこから先は自力で覚えるしかなかった。

ふたりはなんの前触れもなく、忽然と姿を消してしまった。

国王陛下をはじめ多くの国民が、国中ふたりを捜しまわってくれたけど、見つからなかった。やがて、どこかの国が強い魔符をつくるために連れ去ったのではないかという噂が立ち、それを耳にした国王は外部にまで捜索隊を派遣してくれた。

でもいまだに、ふたりは見つかっていない。

だからこそあたしは、いつかふたりが帰ってくる日を心待ちにしていたんだ。

笑顔であたしの前に現れてくれるのを。

手を伸ばして、「ちゃんと勉強しているか？」って頭をなでてくれて。

手を伸ばして、「卒業おめでとう」って抱きしめてくれる。

そんな両親を妄想していた。

絶対に卒業しなければならなかった。

できるのは単語問題だけで、応用力は微塵もないなんて悲惨な現

実を、知られてはいけなかった。

（あたしが両親の評判を落とすわけにはいかないのよ——！）

目が覚めたとき、あたしは自分の枕が濡れていることに気づいた。
最近ずっと見ることのなかったあたたかい夢。

……もしかしたら、かなしい夢。

さみしい夢。

それを、昨日今日と連続で見ている。

（プレッシャーのせいかな……それとも、ふたりがどこかで応援してくれてるのかな？）

わからない。

でもあたしのやる気を奮い立たせるには、充分な笑顔だった。

ふと、ロディナは起きただろうかと隣のベッドに目をやる。

「えっ？」

あたしが思わず口に出してしまったのは、そこにロディナの姿がなかったからだ。掛け布団は少しも盛りあがっていないくて、まるで昨日誰も寝ていないかのようにシーツのシワも直されていた。

（ロディナ、どこに行ったのかな）

まさか、あたしをおいて先に行っちゃった？

とたんに不安が募る。

（そつえばあたし、まだ謝ってない……）

謝ろうと思つてずっと捜していたのに、ロディナが酔っぱらっていてそれどころではなかったんだ。

あたしは急いでベッドから抜け出すと、身なりを整えた。いつもどおりに髪を高く結いあげ、大事なファイルブックを肩から斜めに提げる。

部屋を出る前に、ロディナの忘れものがないかとぐるり見まわして、

「……直しとこ」

忘れものはなかったんだけど、ロディナのベッドと比べて自分のベッドがあまりにも汚かったから、あたしはベッドのそばまで戻るとめくれた掛け布団を丁寧に戻した。

それから部屋を出て、昨夜はのぼった建物横の階段をくだる。

（お店に顔出したほうがいいよね。朝だけどあいてるかなあ）

下の入り口のほうにまわりこむと、昨日見た看板とは違う看板がかけられていた。どうやら、酒場なのは夜のあいだだけのようだ。

ドアに手をかけそつと押しこむ。「キィ」と、甲高い音が鳴った。店内がうるさかった夜はまったく気にならなかった音だけど、静かな朝にはまだ寝ている人たちが起きてしまうのではないかと思うほどに響いた。

その音に、カウンターに腰掛けていたひとりの人物が振り返る。

「！ ロディナ……」

つんとすましたロディナの顔が、そこにはあった。

（ちゃんと待っていてくれたんだ！）

たったそれだけのことなのに、あたしの口もとは自然とほころんでしまう。

駆け寄って行って、すすめられてもいないのに勝手に右隣の椅子に腰掛ける。

「おはよう、お嬢さん。朝食はできてるよ」

「えっ？ ああ、そういうつもりで座ったんじゃないけど……でもいただきます！」

「はっはっは。じゃあ少し待ってて、今出すから」

マスターの笑顔に微笑み返してから、あたしは横目でロディナの様子を窺った。

（ロディナ、顔色が少し悪いみたい）

もともと色が白くて、顔色が変わるとわかりやすいロディナ。昨夜はそれこそ絵に描いた太陽みたいな赤さだったけど、今日は死人のように青かった。しかしロディナ自身は必死にそれを隠そうとし

ているのか、平然とスープを口に運んでいた。もしかしたら、昨夜の醜態を恥ずかしがっている部分もあるのかもしれない。

でもあたしは結局我慢できなくて、

「あの、ロディナ？ 具合が悪いんだったら、無理しなくても大丈夫だよ」

声をかけると、ぴたりとロディナの手がとまった。

「——なんで、そんなことわかるのよ」

「えー？ だって顔色が悪いし、それに、眉間にシワが寄ってるのよ」

「！」

ロディナはさっと、スプーンを持っていない左手でそのあたりを隠す。

「やっぱり頭が痛いのかい？ 二日酔いか、それともスープがまずいのか、どちらかだろうとは思っていたがね」

どう見てもおいしそうにしか見えないスープを運んでいるながら、あたしたちの会話が届いていたんだろう、マスターがそう笑った。

ロディナは気まずそうに、左側の壁にかけてある絵画に目をやる。

かわりに、少し赤みをおびた右の耳が主張していた。

「あ、あなたひとりで、なにができるっていうのよ」

「うん、できない」

「……は？」

マスターからスプーンを受け取りながら、あたしは正直に告白する。

今どん底にいることを自覚しているあたしには、ロディナのように取り繕うものなどにもなかった。

「あたしが今できるのは、ロディナに命令文を構築してもらって、それを魔符に織りこんで、エイラにハンコをもらってくるんだよ。」

最初にロディナが協力してくれなかったら、なんにもできないんだ」

「あなた……」

今日初めて、ロディナがまっすぐにあたしの顔をとらえた。

そこにチャンスを見出したあたしは、スプーンを握りしめ熱をこめて伝える。

「ごめんなさい、ロディナ。あたし、『天才』と呼ばれるあなたには、あたしたちのような悩みなんてないんだって勝手に思いこんで、あっさり頼んであっさり断った。それなのにあなたが断ったことに勝手に腹を立てて、ひどいこと言ったわ。まさかあなたも、あたしと同じように卒業をかけているなんて思わなかったから」

「……………」

あたしの視線の先で、ロディナの瞳が少し揺れる。

「でも今は、一緒に卒業したいと思ってるの。だからね？ 昨日のことは忘れて、今日からまた改めて始めるっていうのはどう？ あたしは夜のことを忘れるから、ロディナは昼のことを忘れて！」

ロディナの頬に一瞬朱が走ったのは、昨夜の自分を思い出したからだろうか。

「——ずいぶん、勝手なことを言うのね」

それだけ呟いたロディナは、再び前を向きスプーンを動かさしはじめる。

「ロディナ？」

「その話、のってあげるわ。でも、ここを出たあとからね」

「！ ええ！」

許してくれるらしい。

（そうと決まれば、急いで食べちゃわないと！）

あたしもスープに向かいはじめた。

追加で運ばれてきたパンとサラダにも手を伸ばしながら、作戦会議は続いていく。

「それで？ わたしはどんな命令文を構築すればいいのよ」

「そうね、とりあえずロディナと一緒にエイラのところまで行ければいいんだから、あたしが先にエイラのところに行ったあと、そこからロディナのところに戻るための一枚と、ロディナと一緒にエイラのところに戻るための一枚ね」

「二度手間だわ」

「いいのよ、体調悪いのに無理することないんだから」

「わたしなら大丈夫よ。無理して動くことには慣れてるから」

「え？」

「それにね——」

ロディナはそこで一度とめると、チラリ上目遣いにマスターを見やうて。

「マスターには悪いけれど、眉間のシワはスープの味のせいよ」

「あちゃー」

大袈裟に頭を抱えたマスターがおかしくうて、あたしはつい笑うてしまったのだった。

【第1章】それぞれの理由 - 4

あたしたちがエイラ「ポットの屋敷へとたどり着いたのはそれから二日後、学校を出てからちょうど三日後のことだった。

「うわー、立派なお屋敷」

あたしが思わず声をあげると、ロディナが「恥ずかしい子……」と呟く。

あたしの背丈の三倍ほどもある格子門の隙間から、それは見えていた。普段見慣れているセルミア魔符術学校の校舎より大きく、しかしそれほど古くもない、美しく整備された豪邸。門から屋敷までの距離は長く、そのあいだには整然と並んだ花々が揺れ、客人の来訪を歓迎しているかのようにだった。

格子門の両脇には槍を手にした兵士がふたり立っていて、あたしたちをジロジロと眺めている。頭を覆う防具に国紋が見えるのは、魔力士はみんな国の宝だからだ。

「きみたちはセルミア魔符術学校の生徒だね。どうしたんだい、こんなところまで」

門の右側にいた兵士が声をかけてきた。

そちらに近づいていったあたしは、まだハンコの捺されていない魔符を二枚取り出して。

「エイラさんに、ハンコをもらいに来たんです！」

「ハンコを？ 学校用のおつかい？」

「違います、わたしたちが個人的に使うものです」

補足したのはロディナだ。

するとふたりの兵士は顔を見あわせ、頷きあう。

「捺すかどうかの判断は、エイラさまが直々に行う。まずはその魔符を見せてもらおう」

「はいっ」

普段王国直属の兵士となんてあまり接する機会のないあたしは、

ひどく緊張して手のなかの魔符を差し出した。その魔符は、ここに来るまでの二日間で、ロディナと協力し織りこんだ三枚のうちの二枚だった。

受け取って、さっと目を落とした兵士は、

「ほう、きれいに書いてあるな」

まずそう褒めてくれた。

それから、

「これ、本当にきみたちが書いたのかい？」

書かれている内容にも驚いてくれた。

その反応が気になったのか、もうひとりの兵士も近づいてくると、その手もとを覗きこむ。

「ふむ、三マス先、と書いてあるのかな。もしかして、本当の目的はガイトさまのところか？」

「そうなんです。でも時間制限があるから、良かったら協力してもらおうと思って……」

「ああ、陛下が探しているアレをつくるつもりなのか」

ふたりの兵士はもう一度顔を見あわせると、思わせぶりな様子で魔符を返してきて、再び門の両側に戻ってしまった。

（あら？）

それからおのおの、腰にさげているファイルブックのなかから一枚の魔符を取り出し、宙に掲げる。

「アオマ・レッヴィジパイネイオエイラゲー！（魔符術・門よ、エイラの名において来訪者を通せ！）」

（！）

そろって読みあげられた古代語に、反応した魔符は輝き、その光が格子門へと伸びていった。

「あ……！」

そして門の中心に描かれた、光の輪。

「さあ入りなさい。この、決してひらかない門に」

兵士の言葉に促され、あたしとロディナも頷きあってから、光の

輪をくぐり抜ける。

その瞬間ずんと重くなった空気に、あたしは魔力士の存在を実感した。

（エイラさんはもう、ほとんど魔力の残っていない低位の魔力士って言われてるのに）

これほどの力を感じるなんて――。

そう、魔力士の持つ魔力は、無限のものではないんだ。そもそも、どういう基準で魔力を持つて生まれてくるのかもわかっていない。ただ、魔力を持つ人は普通の人間に比べ成長・老いが遅く、また、圧倒的な美しさを有していた。そのためある程度早い段階から魔力士として保護されることが多く、そうして国王のもとに入った魔力士たちは、魔力の強さによって役目を振り分けられている。

たとえば、ガイトⅡチャードのように強い魔力を持った高位魔力士は、国を守り維持するために使われるような魔符を託されるし、逆にエイラⅡポットのように魔力の弱まってしまった低位魔力士は、国民が普段使うような威力を求められない魔符を託されるんだ。

だからこそあたしたちも、エイラに『いちばん強い魔符術』のハンコを捺してもらおうとは考えなかった。エイラはアステイス王国内にいる魔力士のなかでは、間違いなく最も力の弱い魔力士だったからだ。

それでも全身にぶつかってくる空気の重さ・圧力には、ロディナも意外だったようで目を大きく見ひらいていた。

「まっすぐに歩いていくといい」

後ろからかけられた兵士の言葉を頼りに、強風のなかを歩くような足取りであたしたちは進む。

（風なんて吹いてないことは、周りの花を見ればわかるわ）

花は美しいまま、あたしたちの足もとで笑っていた。ロディナの長い黒髪も、歩くことで揺れているだけ。

（気楽に「ハンコを捺してもらえばいい」なんて考えてたけど）
「捺してくれるかなあ、ハンコ」

あたしが怖じ気づいて眩いたら、すでに無表情の仮面をつけなおしていたロディナは。

「頼んでみるしかないわ」

そう答えると、先に歩み出て屋敷の扉に手をかけた。

（こういうとき、頼りになるなあロディナ）

この屋敷を見ても全然驚いてなかったみたいだけど、やっぱりお嬢さまなのかな？

その後ろ姿にすがりつくようにしながら、どうでもいいことを考えるあたしの目に、複雑な模様を織りこんだ赤い絨毯と輝くシャンデリアがまぶしい、外観から想像したとおりの玄関ホールが飛びこんでくる。中央には二階に続く幅の広い階段があって、その手すりに施された彫刻がまた、めまいがするほど細かくすばらしいものだった。

「うわあ……」

キョロキョロとあたりを見まわすばかりで、足を動かさないあたしをおいて、ロディナは堂々と踏み入っていく。

そのまま、階段に足をかけた。

「ちょ、ちよつとロディナ！？ 勝手にあがっていつていいのっ？」

あたしが慌てて声をかけると、ロディナは優雅な動作で振り返り。

「あそこに、『ハンコをご希望のかたは二階正面の部屋へどうぞ』って書いてあるから」

すつと、上方を指差す。

「え？」

その指先を追って視線を動かすと、シャンデリアからのびている銀色の鎖の先に、確かにそういう内容の紙がぶらさがっていた。

（シャンデリアの大きさにびっくりして、視界に入ってたわ……）

その美しさもさることながら、「落ちたらどうするんだろっ」とか、「どうやって支えているんだろっ」とか、そういうことが気になって仕方がなかったのだった。

あたしが納得したのを確認したロディナは、前を向き再び階段のぼりはじめる。

「あ、待ってよロディナっ」

入っていくのも恐れ多いが、おいていかれても困るあたしは心を固めてあとを追った。

そのとき、走ったのがいけなかった。

「きゃあっ!？」

毛の長い絨毯にまったく慣れていないせいで、豪快に転んでしまったんだ。

突然の悲鳴にまた振り返ったロディナは、潰されたヒキガエルのようになっているあたしを目にして、思い切り眉をひそめた。

「……あなた、転ぶならせめて階段の上にしてちょうだいよ」

「うっ、だつてっ」

「結構がさつで大雑把なのに、なぜあんなに古代文字をきれいに書けるのか、理解できないわ」

続けて悪態をつきながらも、せっかくのぼった階段をおりてきてくれるロディナ。

そう、あたしは古代文字をきれいに書くのが得意なんだ。それは多くの単語を知っている以外に、唯一褒められる部分だった。

「正確に書かないと、バートチャ（ママ）に手を叩かれたのよ」

痛みをこらえて、あたしはやっと上半身だけ起こしながら答える。結局階段のいちばん下まで戻ってきたロディナは、手を差し伸べてあたしが立ちあがるのを手伝ってくれた。

「ありがとう」

素直にお礼を口にする、すいと視線を外したロディナはかわりに口を動かす。

「『バートチャ』って、お母さんのこと？」

「そう、ちなみにお父さんは『ギヒシー』よ」

答えた瞬間、ふたりのことを思い出して切なくなった。

同時に、

（そういえばロディナ、寝言であたしの両親の名前呼んでたっけ？）
そのことを思い出して、訊いてみようかと思っただけど。

「……わたしも、呼んでみたかったな……」

「え？」

ロディナがあまりにもさみしそうに呟いたから、訊き返すので精一杯だった。

するとロディナはなぜか、怒ったような口調で。

「なんでもないわ！ ほら、早く行くわよ」

「わっ、そんなに引っぱらないでよロディナ！」

あたしを引きずるようにして、再び階段をのぼりはじめる。

（どうしたのかな？）

考えながら、必死についていきながらも、あたしの目はついつい階段の側面にまで丁寧に施された模様に向いてしまう。おかげでそのあと、何度か転びそうになった。ロディナが手をつかんでいてくれたのは、ある意味正解だったかもしれない。

長い階段をのぼりおえると、前に見えたのはこれまた豪勢な装飾に彩られた扉だった。

さすがのロディナも気圧されたのか、ノックをしようか迷う仕草をしていると。

「——入りなさい」

内側から声が届いた。まるで十日くらい休まずに喋りつづけたような、ずいぶんとしやがれた声だった。

あたしとロディナは、自然と目をあわせる。本当に自分たちに言われたのかどうか、確証がないため簡単にはひらけなかったんだ。するとまた。

「入りなさいと言っておろうがつ」

少し怒気を含んだような声が飛んできた。

「はっ、はい！ 入りますっ！！」

とっさに答えたのはあたしだ。

ロディナはそんなあたしに一度頷くと、扉にかけていた手をゆっ

くりと押し出す。

——が、扉はなかなか動かなかった。

「ロディナ？」

「この扉、すごく重いわ」

力をこめているからだろう、顔を歪ませて答えたロディナに、あたしも慌てて。

「て、手伝う！」

ふたりがかりでなんとか押しあげた。

（これ、いくらなんでも装飾つけすぎじゃない！？）

相手が魔力士でなかったら、思い切り怒鳴っていたところだ。

せめて目でアピールしようと、あたしはきつく部屋のなかを睨みつけたけど、そこはひどくがらんとしていて、最奥に備えつけられた簡素な椅子にひとりの老婆が座っているだけだった。

思い切り拍子抜けしたあたしの横を、ロディナがすいと通りすぎていく。

（そつだ、無駄に脱力してる場合じゃない！）

あたしも背筋を伸ばして、ロディナのあとに続いた。

最奥の老婆は、部屋の外にまで届く声を発せられたのが信じられないほどやせ細っていて、ひどく小さな姿をしていた。骨に皮をかぶせただけ、と形容しても間違いではないその姿は、異様で、恐ろしくさえ見えた。

（この人が、エイラ・ポット……？）

『国民のための細かな魔符にハンコを捺している人物』って言うから、もっとやさしそうな人だと思っていたのに。今目の前にいる老婆は、結いあげている髪の毛のせいだけではないつりあがった目と、耳もとまで届きそうなほど大きな口が印象的で、どちらかと言えば物語によく出てくる『意地悪おばあさん』みたいだった。服装だつて屋敷ほど立派なものでなく、それこそそのへんにいる普通のおばあさんが着るような、地味な色のシャツにズボンをあわせたみすばらしい格好だった。

若く美しかった頃の面影はもはやほとんど見られず、こちらに向けられる眼力だけがやけに鋭い。

（こ、怖いよーっ）

思わずロディナの後ろに隠れて、袖をつかんでしまったあたしを、ロディナは一瞥しただけで振りほどかなかった。それどころか、あたしの手もとから魔符を奪うと、一歩前に歩み出て。

「エイラ」ポットさん、ですね。この魔符にハンコを捺していただきましたくて、寄らせてもらいました」

まったく怖じ気づいた様子もなく、交渉を始める。

（ロディナ、すごい！）

学校でも先生たちと対等に渡りあっているせいか、言葉によども戸惑いもなかった。

そんなロディナと隠れているあたしに、なめまわすような視線を這わせたエイラさんは、やがて――

「おぬしら、セルミア魔符術学校の生徒じゃね？」

（……え？ あれ？）

「こんなところによく来たねえ。あそこの学校で使っちやる魔符も、わしがつくってるんじゃない！」

厳格で怖そうな雰囲気を一瞬にして思い切り壊したエイラさんは、糸のように細めた目で自慢げに胸を張ったのだった。

（え、えーと……）

あたしはその流れについていけない。

しかしロディナは相変わらずなようで。

「そうですか、いつもお世話になっています」

ペコリとそう頭をさげてから。

「捺していただきたいのはこの魔符です」

思い切り話を戻して、魔符を手渡すために歩き出した。

袖をつかんでいたあたしはとっさに手を離し、ロディナの後ろ姿を見守る。

――と。

（あ…… ロディナの脚、震えてる？）

少し離れて初めて、気づいた。

屋敷を見たときも、入ったときも、エイラさんを見たときも、近づいている今も。常に平気であるように見せていたロディナ。

でもそれは、決して怖くないからではないのだと。

（強がりなロディナ）

たとえ具合が悪くても、平気だと言った。

その言葉に、態度に、騙されてはいけないのは。

（今いちばん近くにいて、あたしなんだ……！）

気がついたあたしは数歩進み出て、ロディナの手もとから魔符を奪い返した。

「えっ！？」

驚きの声をあげたロディナの横をそのまま通りすぎ、エイラさんの正面へ。

「お願いしますっ！！」

拝むように頭をさげながら、あたしは二枚の魔符を差し出した。

「ほっほっほ」

不敵に笑いながら、それを受け取ってくれたエイラさん。

すぐに片目だけひらいて魔符に目を通すと、あたしたちを順番に比べるように見やつて。

「ふむ、面白い組みあわせじゃのう」

魔符に対することなのか、人に対することなのか、判断に迷うことを呟いた。

それから。

「ガイトのところへ行くのか？ 魔符が二枚なのは、行きと帰り？」
まだ近くにいてあたしに顔を寄せて訊いてきたから、逃げ出した
気持ちちをぐつとこらえて答える。

「そ、そうですね。国王陛下が探しているという、『いちばん強い
魔符術』をつくるために！」

魔符は一度使って消えてしまうから、二枚必要だった。また、向

かう方向が違うというのもある。

エイラさんは一度軽く頷いたあと。

「じゃが、その発表大会の会場は城じゃろう？ おぬしら、城と同じ中央にある学校から来たならわかっちゃうと思うが、ガイトのところから城までは六マスもあるじゃろう。『減力の法則』がかなり影響するじゃろうて、思ったほどの魔力は得られんはずじゃ。ついでにわしのハンコじゃって移動は三マスがぎりぎりじゃから——」
「わかっています。もともと一枚はここからガイト＝チャードのところへ、もう一枚は、ここに戻ってきてから学校まで帰るために、使うつもりでした」

続けたのは、あたしの隣までやってきていたロディナだった。

（え？ えっ？）

二枚目を、ガイトさんのところからここまで飛んでくるために使うつもりだったあたしには、ロディナの言っていることがよくわからない。

「えっと……そもそも『減力の法則』ってなんだっけ？」

あたしも聞いたことはあったんだ。ただそれが関係するのは、魔符を使う側であって織る側ではないから、あまりきちんとは覚えていなかった。それは、あたしの将来の夢が『魔符術士』じゃなくて『魔符職人』になることだったからなんだけど。今回の『いちばん強い魔符術』をつくるという試みには魔符術を行使する部分も含まれているから、それも重要な問題になってしまつらしい。

「ほっほっほ。さすがに『成績が良いほうのルーン』はよくわかっておるようじゃの」

「！」

自己紹介するのを忘れていたにも関わらず、エイラさんの口から発せられたロディナのあだ名。さすがのロディナも驚きを顔に表すと、「はっ」と息を呑んで。

「……そういえば、先ほど学校で使っている魔符もここでつくっていると、言っていましたものね」

「あ、そっか」

（だから情報も入ってくるんだ）

からくりがわかって、少し落ちついた。

普段魔力士との接点なんてまるでない生活をしているだけに、魔力士が本当はどんな力を持っているのか、あたしは理解していなかった。エイラさんのちよつとした言葉や仕草に動揺してしまうのは、そのせいもあるんだ。

同じように息を吐いたあたしたちを見やって、エイラさんはニヤリと笑う。

「いいじやろっ、ハンコを捺してやる。ただし！ ロディナールンはリユーイルーンに、『減力の法則』の説明をきちんとすることじゃ」

「……わかりました」

コクリと頷いたロディナに、今度は満足そうに微笑んだエイラさん。それから左手を掲げて、親指の先を器用にくるくるとまわすと、指先の下からなんとハンコが現れる。

（うわぁ、魔力士のハンコって、指に直接ついてたんだ！？）

これまでハンコが捺される瞬間を見たことがなかったあたしは、その不思議な光景に強く惹きつけられた。横を見るとロディナも、興味深そうにエイラさんの動作を見つめている。

エイラさんが右手に持った魔符に左手のハンコを押しつけると、魔符は一瞬青白い光に包まれた。その光は、あたしたちがこの屋敷に入るとき門のところで見た色と同じで、あたしはそれがエイラさんの魔力の色であるのだと理解する。

同じ動作を二度くり返し、エイラさんの手もとは完成した二枚の魔符が。

「ほれ」

左右に一枚ずつ持ち、それぞれ差し出したエイラさんに、あたしたちは戸惑いながらもゆっくりと手を伸ばした。

「ありがとうございます！」

「ご協力、感謝します」

そしてそれぞれに礼を述べると、エイラさんは齒ぐきを見せるような笑いを浮かべて。

「ほんに、おぬしらは正反对じゃのう。ま、そのほうが仲良くやれることもあるうて。せいぜい頑張るこっちゃ。わしははしやぎすぎて疲れた、さつさと帰りな」

「はいっ、失礼しますー！」

「さようなら」

最後までそろわない返事をして、あたしたちは逃げるようにその部屋をあとにした。そしてあけるときも重かった扉を、臭いものにふたをするかのごとく懸命に閉じようとする。

やっと完全に扉が閉まった頃には、ふたりして肩で息をしていた。
「はっ……はあ……なんか、すごく疲れた……」

あたしがぐったりと告げると、ロディナも珍しく、

「同感」

と呟き、扉を背にして倒れるように座りこむ。

「さすが魔力士、というしかないわね。あの妙な圧力だけでもすごいのに、なに？ あのわけのわからない雰囲気は」

「ぶっ」

あまりに容赦のないロディナの表現に、あたしも隣に座りこみながら笑ってしまった。

「怖いんだか明るいんだかやさしんだか、確かにわかりづらかったね。『と』がたまに『ちょ』になつてるところは、なんかかわいかったけど」

「聞こえちよるぞ！ さつさと行かんかっー！」

「きやあっ」

扉の向こうから飛んできた怒声に、あたしは驚いて跳びあがる。

まるでこの扉自体が震えたかのような、やはり圧力のある声だった。
「ここじゃ休んでられないみたい」

肩をすくませてから、まだ座ったままのロディナに手を差し出す。

「行こ？」

ロディナは数秒その手を見つめたあと、なぜかあたしの顔をもう一度見てきて。

「つかもうとしたら、引っこめたりしない？」

「えー？ ジノラットじゃないんだから、そんな意地悪しないよ」

「そう」

安心したようにひとつ息を吐き、それからやっとロディナはあたしの手を取った。

（ロディナ、なんか嫌な思い出でもあるのかなあ）

考えながらもぐいと腕を引いて、ロディナが立ちあがるのを手伝う。それでもなんとなく訊き出しにくいのは、ロディナがあたしに対してまだ完全に打ち解けているわけじゃないのだと、はつきりと感じているからだった。

立ちあがったあとさっと手を離れたロディナは。

「落ちないでね、階段から」

ひとつ釘を刺したあと、先におりていく。

（多分心配してくれての言葉だっていうのは、わかるんだけど）

できることなら、あたしはもっと仲良くなりたかった。

「平気よっ、あたしは手すりを滑っちゃうから！」

その背中に投げて、階段の端にある手すりに飛び乗る。やたらと細かい彫りものがあるせいであまりスピードは出なかったけど、普通に階段をおりているロディナよりは早く下に着き、ロディナを下から見上げる形になる。

「ねえロディナ、『減力の法則』のこと、教えてよ」

「ああ——そうだったわね」

それはエイラさんがハンコを捺す条件にも出していた。

応えたロディナは階段の途中で足をとめると。

「ちょうどいいから、ここで説明するわ」

まっすぐ下にいるあたしを見おろす。

「いい？ わたしがいるこの六段目をガイド＝チャードの屋敷があ

るマスとして、あなたがいるいちばん下をお城や学校のあるマスとするわ」

（あ、それなら確かにわかりやすいかも）

あたしはおとなしく頷いた。

「『減力の法則』というのは、ハンコを捺した魔力士から一マス離れるごとに、魔符に届く魔力の強さ——つまり魔力値が減っていくことを言うのよ。魔符がわたしと同じ段にいるうちは、最高に強い状態を保てるけれど、この段から離れていくに従って力は弱まっていく」

「えっと……それじゃあガイトさんにハンコを捺してもらっても、お城までの距離ではあまり強い魔力を期待できないってこと？ あ

——」
自分でそう口にしてから、エイラさんが似たようなことを言っていたのを思い出した。

（さっきのはこういう意味だったんだ……）

「当然同じことはエイラ」ポットのハンコにも言える。彼女はさっき、『自分の力では三マスが限界だ』と言っていたでしょう？」

「うん」

ロディナは三段分だけおりてくると、再び足をとめた。

「それはつまり、彼女がいるこの同じマスからでは三マス分飛べるけれど、他のマスからではそれほど飛べないと言うこと。まして限界の三マス先からであれば——」

今度こそ下までおりてきて、さらに一歩だけ、先へ進んだ。

「きっとこのくらいしか飛べないはずよ。そんな状態で使うのはもつたいないじゃない？」

「そっか！ だからフルパワーで使えるこのマスまで戻ってきてから、学校までの三マスを戻ろうってことだったのね」

丁寧に説明してもらったおかげで、あたしにもやっと理解できた。（あたしが『減力の法則』を覚えてなかったのって、もしかして理解を諦めてたからかなあ）

ふと、そんなことを思う。

「日常的に使われている火や水の魔符は、魔力値が『一』に設定されているみたいだから増えようも減りようもないのだけだね。『いちばん強い魔符術』を目指すなら、そこは考えなければいけない問題よ」

「！　もしかして、最初にロディナが『気になることがある』って言うてたのって、このことだった！？」

思い出して声をあげたら、外へ向かって歩き出していたロディナは足をとめ。

「――忘れるって、約束だったでしょう？」

「そ、そうだけど、ロディナが最初からそのこと考えてたんだと思ったら、感心しちゃって……怒った？」

振り返らないで告げたから、あたしは心配になって問いかけた。

「別に、怒りはしないけれど」

返すロディナの声は、やはりどこかつっけんどん。

「ロディナっ」

前にまわりこんで、顔色を見てみたら――

（え……？）

ロディナは確かに怒ってはいなかった。

ただ顔を赤らめ、自分の足もとを見ていた。

（照れて、るの……？）

あまりにも意外な状況に動けないでいると、当のロディナは必死にあたしと目をあわせてきて。

「わ、悪いけど、あなたに褒められると、どこかむずがゆいのよ。

だからあんまり褒めないでちょうだい。むしろけなして」

とんでもないことを言い出したのだった。

【第2章】何度でも - 1

エイラさんからハンコを捺してもらった二枚の魔符のうち、あたしが受け取ったほうの魔符を使用し、あたしたちはガイド「チャード」のいる三マス先まで飛んだ。

——飛んだというよりも、正確には運んでもらったんだけど。

「ああ怖かった……良かった、途中で落ちなくて」

やっと地面におりることができて、あたしは心から呟く。

あたしたちが相談して織った魔符の内容は、『コントウエオウイザツキヤシヤバスリマバー（鳥よ、その輝ける翼で西へ三マス導け）』。それを口にしたとたん、魔力でつくられたまっ白に輝く鳥があたしたちを足（爪？）で器用につかまえ、そのまま飛んできたのだった。

「てつきり背に乗せてくれるのかと思ったわよね」

最初に案を出したロディナにも予想外なことであったのか、そう口にしたあと。

「まあ、ちゃんと目的地の近くには来られたから、良かったけれど」

「あ、ほんと？」

続けたロディナの言葉に、あたしはキョロリとあたりを見まわした。

左手に隣のマスとの境界が見えるほど、マスの端のほうにやってきたらしい。周囲にはぼつぼつと古い民家が建っているだけで、あとは雑草が伸び放題の更地ばかり。さらに西の奥には小さな森のようなものが見え、その一部に尖った屋根のてっぺんが顔を覗かせていた。

（あのちよつとだけ見えてるのが、ガイド「チャード」のお屋敷なのかな）

あたしは例のマップを取り出して、位置確認を——しようとしたのだけど、そもそも今自分がいる位置もわからなかった。

「ねえロディナ、今あたしたちがいるのって、このマス内のどのあたり？」

ロディナならわかるだろうかと、マップをロディナのほうに向けて訊いてみる。

案の定ロディナはあっさり「ここよ」とマスの中心あたりを指差した。

ついでに、

「あなたマップを持っていたから、てっきりわかっていると思っていたわ」

半分呆れたような言葉まで。

「飛んでいるあいだどこを通ってきたのか、見ていなかったの？」

「怖くて見られなかったのよ！」

（むしろ、ロディナだったらよくずつと目をあけていられたわね！）

あたしにはそのほうが不思議だった。これもロディナの強がりの一種であるならば、本気で尊敬してもいいと思うってしまうほど。

「自分が高所恐怖症だったなんて、今日まで知らなかったんだから

……」

「じゃあ今から、帰りの覚悟もしておくことね」

そう、エイラのところから学校に帰るときも、同じ魔符を使う予定なのだった。

「もっつ、ロディナのいじわる〜！」

「ふふ。さあ、さつさと用事をすませてしまいましょ」

ロディナはなぜか機嫌が良いようで、軽い足取りで森のほうへと足を向ける。

（ロディナってもしかして、高いところ好きなのかなあ）

あたしと逆な部分が多いみたいだから、そうなのかもしれない。ひとり肩をすくめてから、あたしは駆け足でロディナを追っていた。

【第2章】何度でも - 2

「おまえたち、なにをしにきた？ ガイトさまは国王陛下直属の魔力士であるぞ。小娘に捺してやるようなハンコは、ここにはない」

「帰れ帰れ！ 警備の邪魔だっ」

エイラさんの屋敷同様、ガイトさんの屋敷にも見あげきれないほど立派な格子門があり、そしてふたりの兵士が立っていた。

ひとつだけ違うのは、その兵士たちの態度だ。

彼らのあんまりな言い草に、あたしは声を荒げて抗議する。

「話も聞かないで『帰れ』だなんて、職務怠慢でしょ！？」

「バカなことを言うな、おまえたちみたいなのを追い返すのが我々の仕事だ！」

「そうだそうだ！ それに、どうせくだらない用事なんだろう？」

「あらっ、国王陛下の望む魔符をつくらうとすることが、くだらないことだって言うの？」

「！」

国王が『いちばん強い魔符術』を探していることは、さすがに知っているのだろう。ふたりの兵士は顔を見あわせ、それから——声をそろえて笑った。

「ぷっ、それでここに来たっていうのか？ だとしたらとんだ見当違いだな！」

「確かにガイトさまはこの国で最も魔力の強いおかただが、その力はこのマス周辺で魔符を使ってこそ発揮されるもの。城ほど離れた場所で強さを競うのは愚か者のすることだ」

「……っ」

あたしはぎりりと下唇を噛む。

（やっぱりそうなの？）

ロディナが心配し、エイラさんが釘をしていた可能性。せっかくガイトさんにハンコをもらっても、『減力の法則』によって魔力は

失われ、他の魔力士のハンコが捺された魔符に負けてしまいかもしれない。

「見てわかるだろう？ おまえたち以外に誰もここに来る者がいないのが、いい証拠だ」

「いや待て、普通の国民ならあたりまえに来ないだろうさ。ガイトさまの手を煩わせることが、国の損に繋がることをちゃんと理解しているからな」

「違うない」

再び大袈裟に笑うふたりに、あたしも負けじと声を張りあげる。

「普通じゃなくて悪かったわね！」

（どうせ卒業もできない落ちこぼれよおおっっ）

後半を心のなかにとどめたのは、あたしなりの精一杯の強がりだった。

すいと、それまでずっと後ろで会話を聞いていたロディナが、前へと進み出る。

（！ ロディナ……）

持ち前の賢さで、兵士たちをやりこめてくれるだろうか。

あたしたちが決して愚か者ではないことを、示してくれるだろうか――？

期待するあたしの視線の先で、兵士たちも笑いをやめた。

「な、なんだ？ おまえ」

「やる気かつ！？」

「ひとつ、訊きたいことがあるのですが」

凜と、落ちついた声音で語りかけるロディナ。

「単純計算で考えるなら、お城で最も力を発揮できるハンコの持ち主は、ナルス・チュリオット。そういうことでいいのかしら？」

（ナルス？ って、どのあたりにいる人だっけ……）

急いでマップを取り出すと、名前から位置を確認する。

（あっ、お城から北に二マスのところにいる魔力士ね）

魔力の強さで言えば三番目っばいけど、お城までの距離を考えれ

ばナルスさんのハンコでつくったほうが強いということなのか。

納得したあたしが兵士たちの様子を窺うと、自信に満ちあふれたロディナの問いかけが意外だったのか、釈然としない面持ちで頭を掻いていた。

「なんだ、ちゃんとわかってるんじゃないか。俺たちをからかっているのか？」

「今からもらいに行けば充分間にあうだろ。さあ、行った行った！それでも二言目には「帰れ」「行け」が出てきて、あたしの感情を刺激する。」

「あんたたち、ちゃんと会話する気あるのっ？」

「会話？ 下々の者となにを話すことがある？ 我々はそれほど暇ではないのだ」

「立つてるだけのくせに、なに言ってるのよ！」

「おまえこそ、そうやってケンカ売っていていいのか？ 賢そうな連れはもう歩き出しているぞ」

「えっ！？」

言われてとっさに振り返ると、見えたのはロディナの後ろ姿だった。来た道に戻ろうとしているんだ。

（なんでっ？ 二対二なら負けないと思ったのに）

「待ってロディナ！ せつかく来たんだから、ハンコもらっていいよ〜」

まだ帰るつもりがなかったあたしがその場から叫ぶと、足をとめたロディナは顔だけ振り返り。

「これだけバカにされたら、もうう気になれないわ」

顔にかかった長い黒髪を、すつと耳にかける仕草をして、再び歩き出してしまった。

（どこか諦めの早いロディナ）

感情を隠すのも。

無理にあがかないのも。

そのプライドの高さから来ているんだろうか――？

あたしには、うまく判断できない。

うまく理解も、できなかった。

「――バカにされたら、それ以上の結果出して逆に笑ってやればいいのよ！」

こぶしを握りしめて、ロディナの背中に想いを投げつける。

「それに、魔力値だけが魔符の強さを決めるわけじゃないって、教えてくれたのはロディナでしょっ？」

仲直り（？）してからエイラさんの屋敷へ着くまでの二日間、あたしたちが織った三枚の魔符のうち最後の一枚は。ふたりで散々意見を出しあつたなかで生まれた、これまでに紡がれた例のない命令だった。だからこそあたしは自信を持っていたし、それに国一といわれるハンコを捺してほしいと思っていた。その結果たとえそれがいちばんになれなくても、あたしにとっては大事な証しだったんだ。共同作業の集大成として。

――両親が戻ってきたときの、笑い話として。

「絶えっ対もらってやるんだから――！」

もうロディナの反応は無視して、あたしはくるり身体を反転させると、そのまま格子門へと向かって突撃を開始した。

「お、おいっ？ おまえなにをする気だ！」

見張っている兵士たちも無視して、堂々と格子門によじのぼりはじめる。自分が高所恐怖症であるとわかってしまった以上、怖い気持ちがないわけではなかったけど、あたしの手足はとまらなかった。「バカ！ おりろっ。のぼったところでどうせなかには入れないぞ！？」

「そんなのわかってるよ！」

エイラさんの屋敷でも、格子門は不思議な力で閉じられているようだった。だからこそ出入りに専用の魔符が必要だったんだろっ。

それにそもそも、あたしはなかに入ろっとしたのではない。

「ガイト＝チャード！ 聞こえてるなら出てきなさいよ――！」

あたしをおろそくと足を掴んでくる兵士を蹴り飛ばしながら、続

ける。

「ちよつとハンコ捺してほしいって言うただけじゃないつ、簡単なことでしょ!? …… ってこら、スカート引っぱらないでよ、エツチゝっ」

「いいからおりろ! あまり門に触れていると――」

「! きゃああっ!?!」

兵士が最後まで言いおわらないうちに、あたしは手を離さざるをえなくなった。一瞬、身体のなかを鋭いなにかが駆け抜けたんだ。それは痛みを伴い、あたしの握力を奪った。

(落ちる……っ)

あたしはさらなる痛みを覚悟したけど、身体が地面まで届く前に素早く手を伸ばしてくれた兵士たちに受けとめられる。

「リユーイーールン!」

この騒ぎにはさすがに黙っていられなかったのか、まだ兵士の腕のなかにいるあたしのもとに、ロディナが駆けつけてきた。

あたしはその手を借りて、ゆっくりと地面に足をつけ立ってみる。まだ少し余韻が残っているようで、ふらりと視界が揺れた。

「大丈夫? なにをしているのよ、あな た っ たら」

きつい口調はいつものこと、しかし今はそのなかにちゃんとあたしを案じている気持ちが見えるような気がして、あたしの体温が少しあがる。

「ご、ごめんなさいっ、呼んだら出てきてくれるかと思って」

「――呼ばれなくとも、この騒ぎでは気になって仕方がないだろうっ(えっ?)」

不意に割りこんできた声は、間違いなく格子門のほうから聞こえてきた。

急いで視線をそちらに向けると、格子門を挟んだ向こう側に人影が――

「……っ」

その姿を視界にとらえた瞬間、あたしは自分の前に突然絵画が出

現したような、不思議な感覚に襲われた。

（なに、これ……）

なんて現実味のない人なの？

まるですべて計算されたつくりもののような、あまりにもきれいすぎる違和感。自然界に必ずといっていいほど存在する規則を外れた要素が、なにひとつ見あたららないんだ。

顔を形づくるパーツのひとつとってみても、誰もが「美しい」と口にできるような、それでいて目を閉じるとすぐに忘れてしまえそうな、決して描くことのできない存在が、そこにはあった。

（これが、ガイト＝チャード？）

魔力士はみんな並外れた美しさを持っていると言われているけど、いちばん力を持った魔力士は、いちばん美しくもあるようだった。

—— かなしいことに、ガイトさんは男だったけど。

「お、お、男のくせにそんなにきれいだなんて反則よ…… あたしを傷つけたお詫びに、今すぐこの魔符にハンコ捺しなさいよおおっ！」

半分悲鳴のような声音で叫んだら、同じようにガイトさんに見入っていたロディナも我に返り。

「ちよつとリ्यूーイールン、さすがにそれは無理があると思うわ」

「え、そう？　じゃあ…… 捺してくれなかったら、この門の前で焚き火しちゃうんだから！」

「おまえたち、ガイトさまの前だぞっ？　もつとかしこまらんか！」

「しかも言っていることの意味がわからないぞ？」

「うるさい！　乙女の嘆きがオジサンにわかるもんですかっ」

「オジサン！？　俺はまだ二十代だぞ！」

「こっちは三十代だ！」

「一体なんの話をしているのよ、あなたたち」

「何歳からオジサンなのかは大事な問題だが、同様におまえたちが本当に乙女なのかも重大な問題だ！」

「そうだぞ、大体にして乙女はもつとおしとやかなものだろう？」

「――黙れ」

ともすれば永遠と続きそうだったどうでもいい話題を、ガイトさんの鋭い声がとめた。

「普段静かなところにひとりでいる私には、騒音はひどく身体に響く。いい加減にしてくれ」

「そつ、騒音ですつてえー!？」

その整いすぎた顔からは想像できない口の悪さは、兵士たちとい勝負だった。

（この上にして、下ありつて感じね）

あたしは改めてガイトさん――ガイトを睨みつける。

身体全体を一枚の大きな布で覆うような格好をしているため、体格はよくわからなかったけど、高さと幅から見るに、取っ組みあいではならんとか勝てそうな気がした。

「そもそもきみたちはなにが目的なのだ？」

そんなあたしの視線をあつさりと受け流し、涼しい声音で問いかけてきたガイトの顔は、なぜかあたしではなくロディナのほうに向いていた。

ロディナは「仕方ない」といったふうにと息を吐くと。

「わたしたちは国王陛下が望んでいる『いちばん強い魔符術』をつくるために――」

「違う。なんのためにその発表大会で優勝しようとしているのかを、訊いているのだ。きみたちにはたいした野望があるようには見えなからな」

「!」

遮って続けたガイトの問いは、明らかにロディナには答えにくいものだった。

（ダメな自分を肯定しないといけないものね）

察したあたしは、素早くふたりの視界のあいだに割りこんで答える。

「魔符術学校を卒業するためよ！ 超個人的な理由で悪かったわね

っ

先手を打って自虐に走ったら、ガイトは「ふふん」と鼻で笑い。

「まだ『悪い』とは言っていない。——間違いなく、言うはめにはなっただろうがな」

（やっぱり腹立つなあ）

チラリとロディナの様子を盗み見てみたら、表情は変えていなかったものの手を強く握りこんでいた。だいぶ我慢しているんだろう。（あたしと違って、バカにされることに慣れていないみたいだから、きついだろうな）

さっきだって兵士たちにバカにされたくらいで帰ろうとしていたんだ。ロディナにとっては相当屈辱的なことだろう。

ロディナのためを思うなら、ここで引きさがったほうがいいのかもしれない。

あたしは迷いはじめていた。

しかしそんなときに限って。

「ふむ、だが待てよ。卒業もできない落ちこぼれが、一体どんな魔符を書いて持ってきたのか、興味がわいてきたぞ。国一を目指す魔符だ、さぞかしすごいものなのだろうな？」

ガイトが意外なことを言ってくる。どこか楽しそうに、目を細めながら。

「どれ、見るだけなら見てやろう。よこせ」

（こ、こいつ、絶対さらにバカにするつもりで見る気だ！）

表情でわかった。周りの兵士たちだってニヤついている。

渡すべきか、渡さずべきか。

迷うあたしは、魔符を抱きしめるように胸もとにあてた。

（——あっ）

それを横からさらったロディナが、格子門の隙間からガイトに差し出してしまふ。

「ロディナ……」

名を呼ぶと、一瞬だけこちらを振り返ったロディナは。

「この魔符に自信があるのは、わたしも同じだから」

見られても恥ずかしくはないと、強い言葉で言い放ってくれた。すぐ目の前で告げられたガイトは、唇の端でゆらり笑ったあと、視線を受け取った魔符へとおとしていく。まるで細かい字を読むときのように、限界まで細められていた目が、やがて——大きくひらいた。

「ほう……なるほど、二重連動詞を使用して威力強化をはかっているし、発想も悪くない。少なくとも私は見たことがない命令だな。しかし、『落雷』という単語は魔符術学校で教える範囲には出てこないと思っただが？」

その魔符の出来がよほど意外だったのか、ガイトの声音から毒が消えていた。

それに答えたのは、ロディナだ。

「だってリユーイルーンは、あのルーン夫妻の娘ですもの」
「！」

息を呑んだのはガイトだけではない。まだそばにいる兵士たちふたりも、驚きで跳びあがっていた。

実はあたし自身も。

（やっぱりロディナ、あたしの両親だって知ってたんだ）

あのと時の寝言も、きつと偶然ではなかっただろう。

確かにあたしがその単語を知っていたのは両親のおかげであり、その単語を発想したのも両親との思い出がきっかけだった。

でもそれだけでは、当然『いちばん強い魔符術』なんてつくれない。

「あ、あたしだけの力じゃないよ！ ロディナがそれを文章に組みこんでくれなかったら、あたしは定型文しか織れないんだから」

「リユーイルーン……」

複雑な表情で見つめあうあたしたちを、ガイトも交互に見つめて。あたしたちのあいだにある理由と、感情を、おそらくいくらか読み取ったんだろう。

「ふむ、いいだろう」

「捺してくれるの!？」

肯定的な頷きに、すぐ食いついたら。

「もっと面白い魔符が、織れたらな」

「えーっ？」

条件をひとつ押しつけてきた。

「できたら呼べ。もっとも、時間をかけすぎると城まで戻る時間がなくなるだろうがな」

そこまで言いおえると、ガイトはひらりと布の裾をひるがえし、奥の屋敷へと歩き出す。

「ちょ、待ちなさいよ! 面白い魔符ってどういうことよ? あたしたちは『いちばん強い魔符術』をつくりたいんだけどっ!？」

格子門にかじりついて叫ぶと、ガイトは一度足をとめ。

「挑戦するもしないも、きみたちの勝手だ。ナルスのところに行きたければいつでも行けばいい」

振り返らずにそれだけ答えると、長い銀髪を優雅に揺らして遠ざかっていった。引きずっている布の一部が、くねくねと手を振っているようにも見えた。

（一体どういふつもりなのかしら?）

また身体に衝撃が走ることを恐れて、格子門から手を離れたあたしは考える。

（あの魔符を見て、少しは認めてくれたみたいだったけど……もしかして、あたしたちならもっとやれると思った!？）

—— だったらどんなにいいことが。

自分で考えたことを、すぐに否定した。

あたしの腕を、ロディナが不意に引っばってきて、格子門から少し離れた位置まで連れられていく。

「なっ、なに? どうしたの、ロディナ!？」

（まさか本当に帰るつもり!？）

「作戦会議よ」

焦るあたしとは対照的に、いつもどおりの落ちついた声音でロディナは答えた。それからめいっばいのため息を、肩で吐き出して。「正直言つて、あなたの強引さには呆れているわ。あなたにはプライドがないのね」

その言いかたには、さすがのあたしも眉を動かす。

「ないわけじゃないけど……自分のプライドよりもずっと大切なものがあるから。どちらかを犠牲にしないといけないのなら、あたしは自分のプライドを犠牲にする！」

次に眉を寄せたのはロディナだった。

「……バカにされても平気なの？」

「平気じゃない！ でも前に進むためなら、我慢できるよ」

「理解できない」

あたしの答えがロディナにとってまっすぐすぎるからか、ロディナは首を傾げ肩をすくめた。視線を外し、地面を見やる。

まるでエイラさんの屋敷のなかにいたときのように、重苦しい空気があたしたちを包みこんだ、そんなとき――

「はいはい、三日目にして再びケンカ勃発！？ ふたりのルーンに独占取材だっ！」

そばの木陰から跳び出してきたのは、またしても双眼鏡を手にしたジノラットだった。

「ジノラット！？ あんた、まだついてきてたのっ？ そんなに気取ってるのよ」

「立派なストーカーね」

あたしだけじゃなく、ロディナにも冷たく言い放たれて、ジノラットはすでに涙目だ。

「ち、違うつ、俺はだな、女ふたりで旅するのは危険だと思って、陰から見守ってたんだ！」

「やっぱりストーカーだわ」

「ち、ちが――」

「どうせあんたも『いちばん強い魔符術』つくろうと思ってるんじ

やないの？　それでー、かわいい彼女が欲しいとか、バカなことお願いしようとしてるんでしょ！」

「ちが、ちが……　違わないよ、うわああああん!!」

久々に顔を見せたばかりだというのに、耐えきれず泣きながら逃げていくジノラット。

「一体なにをしにきたのかしら？」

その後ろ姿を呆れたように眺めて呟くロディナの横で、あたしは笑いながら、ふと昔のことを思い出していた。

（そういえば、ずっと前にもジノラットがああして逃げ帰ったことがあったつけ）

まだあたしの両親がいた頃、家に遊びにきていたジノラットが、洗濯の手伝いをしていたあたしを水路のなかに突き落としたんだ。そして怒ったあたしが、近くにあったアレを手にはジノラットを追いかけて――

「ああああつ!?!」

（そうだわ、アレがあったじゃない!）
降らせるのに雷よりも最適なものが!

あたしはひとり興奮する。

「な、なによいきなり、大声あげちゃって。びつくりさせないでよ」
ジノラットの登場のおかげで、再び空気をやわらげたロディナが、今度は動揺の声をあげた。

「ごめんごめん。でも、良い案が浮かんだんだ!　ロディナ、これを使って文章考えてみてくれない?」

めげないあたしは無理やりロディナの耳に口をあてると、ひそひそ話を始めた。

（これは大発見よ!）

誰にも聞かれてはいけない。

たとえ誰も、聞こうとしている人がいなくとも――

おとなしく聞い入ってくれるロディナの眉間には、徐々に深いシワが刻まれていく。

「ちょっとリユーイルーン、そんなもの落として本当に効果があるの？」

「絶対痛いはずよ！ しかもね、精神的ダメージも相当大きいと思うんだ。だからガイトだって納得すると思うわ！ 別に見てくれるのは一回だけなんて言っただけでなかつたし、試しに考えてみてよ。ね？ いいでしょ？」

手をあわせて必死に頼みこむと、ロディナは「やれやれ」と呟きながらも。

「まあ、いいけどね。落雷の命令文を少しアレンジするだけでできるから」

「さすが天才！ よっ、世界ー！」

「バカなあおりはやめて」

「ハイ、スイマセンデシタ……」

それからあたしたちは再び協力して、新たな魔符を一枚織りこんだ。

【第2章】何度でも - 3

「ん？　なんだこの単語は。以前見たことがあるような気もするが……」

今度はロディナが率先して門に触れ、再び姿を現したガイトにそれを見せると、ガイトは首を傾げて呟いた。それから記憶の淵をさまようように目をつむり、しばらく押し黙ったあと。

「——ああ、そうか。アレか。なるほどな……魔符関連で使われることなどまったくなかったものだから、すっかり失念していた」
やっと目をあげたガイトの表情は、どこか晴れやかだった。

「ふん、いいだろう。この魔符は、それが実行される瞬間を見たいと思わせる力がある。正直これが『いちばん強い魔符術』として認められるかはわからないが、約束どおりハンコは捺してやろう」

「やった〜！」

跳びあがって喜んだあたしは、とっさにロディナの手をつかもうとした。それと同時に、意外にもロディナもあたしの手を取ろうとしていたから、手のひらはきれいに重なり喜びを分かちあうことができた。

でもそれは数秒と持たず、ロディナはすぐ我に返ってしまっ、はしゃいだことを恥ずかしく思ったのか手を引いた。

その仕草が、あたしにとってはかわいくて面白くて仕方がなかった。

「なにを笑っているのよ」

「ごめん。だって嬉しいんだもの！」

本当は違う意味も含まれていたけど、ロディナの機嫌を損ねるのはもうこりこりだから黙っておく。

「どれ、では面倒だがハンコを捺してやるか」

格子門を挟んだ向こう側で、ガイトがゆっくりと両手を近づける。その様子に、あたしは思わず。

「えっ、この場でやるの？」

口に出してしまった。

「なんだ？ 不満か？」

動作をとめたガイトが不思議そうにこちらを見やっただから、あたしは頭の後ろを掻いた。

「いや、ハンコを捺すときは屋敷のなかに入れてもらえるのかと……」

「入りたいのか？」

「正直に言っと、とても！」

魔力士としての力がそれほどでもないエイラさんの屋敷でも、広くて豪華で圧倒されたものだった。ならば国一の魔力士と呼ばれるガイトの屋敷であれば、もう想像もできないくらいすてき空間が広がっているのかもしれない。

（むしろそうに違いない！）

瞳を輝かせて「入れて」と訴えていると、ロディナが横から「やめなさいよ」と腕を引いてきたけど、ここで引きさがるわけにはいかなかった。

その様子を見ていたガイトは、ふつと口もとを緩ませる。

「ではこちらにも正直に言うが、無理だ」

「えーっ？」

「きみたち、エイラの屋敷に行ってきたのだろう？ エイラのハンコのおいがする。そしてそれならばわかるはずだ。エイラの屋敷の内部では、全身になにか不思議な力を感じなかったか？」

「！」

あたしたちは顔を見あわせ、頷いた。

「確かに、なんだか押しつぶされそうな圧力が……」

「エイラ」ポットの近くでは特に感じられました」

「それは魔力のせいだね。魔力を有している私たちでも、自分の力だけで完全に抑えることは困難で、こんな布切れや屋敷を取り囲む防壁でなんとか外には出さないようにしているが、魔力士でないも

のがこの内部に入りこむと相当きついらしい」

「あ、そっか」

エイラさんの屋敷でも結構違和感があったのに、力が何倍もあるガイトの屋敷では、一体どうなってしまうのか想像できなかった。

（魔力がたくさんあるといっても、いいことだけじゃないのね）

頭が良くても悩みのあるロディナのように、それぞれ違った想いがあるんだ。

そう納得したものの、同時に気になることもあった。

「じゃあもしかして、あんたはずっとそのなかにひとりぼっちでいるの？ さみしくない？」

その切り返しにはさすがのガイトも予想外だったようで、初めて目尻をさげると。

「私を何歳だと思っている？ きみたちの倍以上長く生きているのだぞ。ひとりにはもう慣れた」

「！」

その答えに、あたしは心をつかまれたような気がした。

（「さみしくない」って、否定はしないんだね）

ひとりでいることにどんなに慣れたとしても。

そこに宿る、さみしさはなくなるらない。

それは、両親と理由もわからず離ればなれになっているあたし自身が、よくわかつていることだった。まして、魔力士は通常の人間よりも寿命が長いというんだから、よりひとりの時間が増えることになる。自由に動きまわることもできず、王のため国のためハンコを振るいつづけるんだ。

「——ねえ。良かったらあたし、たまに来てあげようか？」

「は？」

思いつきで口にしたことだったけど、それは意外と良い案である気がした。

あたしは続ける。

「だってこの兵士たちは全然騒がないからつまんないでしょ？ あ

たしがたまに来て騒いであげる！」

「……そんなことをするというのなら、ハンコを捺してやらないぞ」
「えっ？ それは困るなあ……じゃあ嫌がらせの手紙だけにしてお
くわ」

まったく口の減らない——むしろ減らす予定のないあたしに、ついにガイトも破顔して。

「わかったわかった、好きにすればいい。ハンコ捺してやるからさつさと帰ってくれ」

言うなり、素早いスピードで左手の親指にあるハンコを取り出すと、魔符の下のほうにポンと捺してくれた。

「『減力の法則』にも実は二種類あってな。耐届マス数——つまり力の届く範囲のなかで、ひとマスずつ均等に魔力が弱まる『定力法』と、ひとマスずつ同じ比率で魔力が弱まる『定率法』だ。頭のよさそうなほうは理解できるだろうが、頭の悪そうなきみのために説明しておく、『定力法』は同じペースで力が減っていく、最終的に必ず魔力値が一残る。日常生活に使われているような魔符は、大体こっちだな。それとは逆に、『定率法』は前半『定力法』よりも魔力の減りが早くなるが、その分後半に強く最終的にもある程度の魔力値が残る。こちらは攻撃用や防御用の魔符でよく使われる減力法だ」

「——で？」

あたしがそう訊き返したのは、内容が理解できなかったのはもちろんだけど、ガイトがなぜそんな話をし出したのかもわからなかったからだ。

その反応は、おそらくガイトにとって予想どおりだったんだろう、唇の端で意地悪く笑うと。

「私の耐届マス数は十二マス。きみたちがこれを使う予定の城はちようど半分にあたる。よってそこで使う分には、どちらの方法を選んでも同じくらいの強さになるのだが——」

「が？」

次に先を促したのはロディナ。

（でもロディナはきつと、わかってて訊いてるよね）

あたしが予想した、その証拠に。

「もしかして、『定率法』のほうを選んだのですか？」

ロディナはどこかトゲのある声音で続けた。

（でも、『定率法』は前半に力の減りが早いって、さっきガイト自身が言ってたじゃないの）

それなのにあえてそちらを選んだ？

あたしもつられて、ガイトを睨んでやる。

しかしガイトは、涼しい顔でそんなあたしたちの視線を受け流し。
「きつと感謝すると思うがね」

言いながら、あるうことか手にしていた魔符を紙飛行機のように折り曲げ、格子門の隙間をめがけ投げ飛ばしてきたのだった。

「ちよっ……！？」

うまく門の外に抜け出た魔符だったけど、そのまま風に乗ってどこかへ飛んでいこうとしたところを、跳びあがってぎりぎりでつかまえる。

「なにするのよ！ どこかに飛んでいつちゃったらもったいないじゃないっ」

文句を言っても、さらに。

「ついでにこれもやろっ」

とガイトは、格子門の向こう側から次々に魔符を飛ばしてくる。

「わわわっ」

「こんなに！？」

右往左往しながら拾い集めるあたしたちを、あわれに思ってたか兵士たちも手伝ってくれた。

全部で十枚ほどだろうか。あたしが一枚一枚広げみると、すべて攻撃用の魔符だった。

「……あたしたち、別に誰かと戦う予定なんてないんだけど？」

「いらぬなら返してもらおうが？」

「いただきます！」

一言文句を言ってみたものの、返せと言われれば欲しくなる。あたしは釈然としないものを感じながらも、ロディナと五枚ずつ分けてファイルブックにしまいこんだ。

「これでやっとな帰れるわ」

せいせいしたといった感じで呟いたロディナに、あたしはこっそりと苦笑する。

（なんだかんだ言ってもロディナ、最後までつきあってくれたし！）
魔符にも最高のハンコをもらえた。屋敷に入れなかったのは残念だったけど、あたしは結構満足だった。

「二度と来るなよ」

そんな声に送られながら、ガイトの屋敷をあとにする。

もう木々の隙間から夕日が差しこむような時間帯だ。早めに街のほうに出て、セルミア魔符術学校と提携している宿を探さなければならぬ。

「そういえば、ジノラットはどうしたんだろ」

あたしはふと、新しい魔符を発想するきっかけをくれた幼なじみのことを思い出した。

「あの人が、わたしたちの分まで宿を予約してくれるような人ならありがたいのだけど」

「あー、ないない」

むしろ覗き見るのに最高の場所を見つけるため、躍起になっていることだろう。

（ずっとロディナを見守ってたみたいだし、もしかしたらまだそばにいるのかなあ？）

歩きながらあたりを見まわしてみたけど、小さいとはいえ森のなか、木が多くて捜しきれなかった。

その森を抜けて広い場所に出て、人で賑わう街までは遠い。更地帯を抜けてさらに歩いていくと、今度はところどころ茶色く盛られた土地が見えてきた。

（あら、畑だわ）

この広い土地を利用して、作物などがつくられているんだろう。更地よりはよっぽど人が住んでいる感じがするから、なんとなく安心したあたしの足取りは軽やかだった。

（このまま進んでいけば街に着くよね）

さすがにこの時間畑仕事をする人は見かけなかったけど、かわりに鳥の声や虫の声を相手にしながら、畑と畑のあいだにつくられた細い道を歩いていた。

——そんなときだった。

（！ 人だ……）

同じ道の前方から、歩いてくるのはふたりの男。

ひとりはおごヒゲを生やした、小太りな男。もうひとりは派手なバンダナを巻いた、ヤセ男。

おそらくそのふたりが、場にあつた服装をしていたら。

おそらくそのふたりが、手に魔符を持っていなかったら。

あたしもロディナも、そう気にすることはなかったんだろう。

「ねね、ロディナ。前から歩いてくるあのふたり」

「ええ、怪しいわね」

あたしたちの制服だつてこの風景からは充分に浮いているけど、向こうの服装も相当だった。とても畑仕事なんてできそうもない、前が大きくあいたシャツに、引きずりそうなほど裾の長いズボン。一体どこの地方で流行っている服装なのか、問いただしいくらいだ。

（それに、あの魔符は——）

日頃から魔符と接しているあたしたちにはわかる。ふたりの男が手にしている魔符は、少なくとも魔力値一のものではなかった。魔符からあふれ出た魔力が、微かに伝わってくるんだ。

（家事用でも遊び用でもないのに手に持って歩くんなんて、どういうつもり！？）

日常生活で使われているような魔符であれば、魔力値が一しか残

っていないから、どう使ったとしてもある程度の安全が保証される。でもそれ以外の魔符を素のまま持ち歩くことは、自殺行為に他ならない。なぜなら、魔符の発動条件のひとつである『使用者の読みあげ』は、その魔符の持ち主でなくても有効だからだ。声の届く範囲であれば——魔力自身が命令されたと理解できる範囲であれば、誰が読みあげても発動してしまう。つまり、偶然誰かが読みあげた魔符と同じ魔符を手に持っていた場合、勝手に発動してしまうことになるのだ。

あたしやロディナが使っている音声を遮断できる特殊なファイルブックは、そういう誤発動を防ぐために開発されたものだった。そして、同じ魔符を使うことの多い魔符術学校の生徒には、携帯が義務づけられていた。もちろん一般向けの商品だって開発されていて、かなりの数が出まわっている。

（あのふたりも、腰にそれっぽいのつけてるんだけどな）

それでもあえて、魔符を手に持っている意図は？

相手はただ、場違いな服装で魔符を手にしているだけで、攻撃的な視線をくれたわけでも挑発的な言葉を投げてきたわけでもなかった。

それでもすれ違うとき、あたしたちはやけに緊張した。

人通りがまったくないからだろうか。

細い道で、一列にならねばならなかったからだろうか。

それとも——ガイトからもらった大切な魔符を、持っていたから？ オレンジ色の光の下で、一瞬だけ影を踏まれた、その瞬間。

「——さあ、その魔符をもらおうか」

低い声が聞こえた。

どちらのものはわからなかった。

「アオマ・イツィエネルイビコオクリヒーフレ！（魔符術・炎よ、清き熱で敵を滅せ！）」

「……」

直後続いた魔符術に、あたしは振り向く余裕もなくロディナの手

を引いた。そのまま、斜め前方——少し低くなっている畑のほうへと倒れこむ。そのすぐ上を鋭い炎が通りすぎていったのは、背中や頭上を感じた熱さでわかった。

（なんなのよいきなりっ!?!）

「警戒していて正解だったわね」

呟いたロディナは素早く立ちあがり、ファイルブックを左手に掲げ反撃の準備をする。

「ほう？ 戦う気か？ イマドキの魔符術学校生は威勢がいいんだな」

あたしも慌てて身体を起こすと、唇の端をあげバカにしたように笑うヒゲ男の姿が見えた。手に持っていた魔符が消えているところを見ると、さっきの魔符術はこちらの男が発動させたようだ。

歩数にして五歩分くらいか、高さは違うもののごく近い距離で向かいあう。

「一応訊いてあげるけど、目的はガイト⇨チャードの魔符？」

ロディナがいつもどおりすぎる冷静な声音で問いかけると、その言いかたが気に障ったのか、バンダナ男が血管を浮き立たせ叫んだ。

「俺たちは何度頼んでも断られたのに、なんでこんなガキなんかに……!」

（なるほど、そういうことね）

ガイトのハンコは、本来であれば一般人が捺してもらえるようなものではない。それは兵士たちもガイト自身も言っていたことだ。

でも、その強力さゆえに欲しいと思う者はあとを立たないんだろう。やっと理解が追いついて、体勢を立てなおしたあたしは言い放つ。

「いきなり攻撃してくるようなやつに、誰があげるもんですか！ あたしたちだって、これをもらうのに苦労したんだからっ」

それを横から奪おうなど、論外だ。

ロディナに負けじとあたしもファイルブックを構えた。

（——!）

そこに並んでいる、普段は所持していない攻撃用の魔符を改めて

目にして、あたしはふと気づく。

（もしかしてガイトは、こうなることを予想してた？）

あたしたちにこれを持たせたのは、自分のハンコを捺した魔符が狙われることをわかっていたからなのか。

「なら無理やり奪うまでだ！ アオマ——」

バンダナ男が魔符術を唱え出したから、あたしたちは急いでそこから離れた。もっとも、それは逃げるためじゃない。魔符術対魔符術の場合、相手の魔符術に対抗するためにはこちらも魔符術を読まねばならなくて、あまりに近い距離にいるとよけることしかできないのだった。それくらいは、魔符術での戦闘経験がないあたしでも基礎として知っていた。

もしくは——

「アオマ・ティアツエネバシャファウイ！（魔符術・風よ、鋭い牙で敵を切り裂け！）」

バンダナ男の声を遮るようにして続いたのは、あたしにとって聞き覚えのありすぎる声だった。

「うわぁ！？」

「なんだと……っ」

他人によつて読みあげられたバンダナ男の魔符は、その手もとで発動し、ヒゲ男も巻きこみながら切り裂いていく。

「ふたりとも、今のうちにこっち！」

そんなヒゲ男・バンダナ男の向こうから飛び出してきたのは、いつもどおり双眼鏡を手にしたジノラットだった。

「あんた、その双眼鏡でこいつらの魔符読んだのね？ まさか覗き以外で役に立つことがあるなんて……！」

「変なところに感心してんなよ！ それより早く、ひとつ南のマスに行くぞっ、走れ！」

なぜ南に行くのかはわからなかったけど、ジノラットの妙な迫力におされてあたしたちも走り出す。南のマスとの境界ならばずっと見えていたから、越えるだけなら簡単なんだ。

（焔の持ち主さん、ごめんなさいっ！）

心のなかで謝りながら、焔を思い切り横切っていった。

「ま、待ちやがれっ……！」

受けた魔符のダメージからまだ立ちあがれない大人たちを尻目に、やわらかい土のなか必死に足を動かす。

そのあいだにも、ロディナは器用に頭を回転させていたのか、

「もしかして、あの人たちの魔符に捺されていたハンコ、ナルスⅡ
チュリオットのものだった？」

「！」

南へ向かう理由を見事に弾き出していた。

（すごいっ、ロディナ）

あたしなんて逃げることで精一杯なのに。

いちばん前を走るジノラットも、驚きを隠せずに振り返る。

「そのとおり！ だから、少しでも相手の魔符を弱くしておいたほうがいいだろ？」

（『減力の法則』、ね）

北側にいるナルスのハンコは、南に行くほど弱くなる。

でも――

「それって、こっちの魔符も弱くなるんじゃないの！？」

ましてガイトは、わざわざより多く減力される『定率法』を選んだと言っていたんだ。今のマスから移動しないほうが、より強い魔力を保てるだろう。

でも、珍しく口もとにやわらかい笑みを浮かべたロディナは、

「そう……おそらくガイトは、それが狙いだっただのね」

「えっ？」

意味深なことを告げた。

そのロディナの背景に、あたしは嫌なものをとらえる。

（やばっ、あいつら次の魔符を唱えてた！）

こちらに向かってくる魔力の波が見えた。

ファイルブックから一枚魔符を取り出して、こちらも負けじと読

みあげる。ロディナと魔符を分けるときに、自分で読めるものだけを受け取っていたから間違えはしない。

「アオマ・ブレスルアーアンショエグソイ！（魔符術・土よ、大地を突き破りその存在を示せ！）」

水の魔符術には土の魔符術を。それはあたしでも知っている、最も簡単な対抗手段。また、ガイトからもらったこの土の魔符術は、攻撃だけじゃなく防御も行えるものだったから助かった。

あたしのすぐ足もとから、ひとつめの土トゲが出現する。その土トゲは次々に姿を現し前へ進んでいくと、こちらに向かってきていた魔力の波を完全に吸収してくれた。

（さすが！ ガイトの魔符は効力ばっちりね）

トゲは魔力を吸収するだけにとどまらず、ご丁寧にあいつらの足もとまで出現し、下から突き刺してやったみたい。まるで熱い鉄板の上にのせられたように、片足ずつをあげて踊るふたりの姿が見えた。

「今のうちに行きましょう」

その様子がおかしくって、つい見入ってしまったあたしたち（ジノラットなんて双眼鏡で覗いていた）に、ロディナは呆れたような声をくれると先に走り出してしまった。

「あ、待ってよー」

そろわない足並みで、やっと南への境界を越える。ここからはガイトの魔符の威力も少し落ちるから、注意しないと。

「あの人たちをこちらのマスまでおびき寄せるには、魔符術が届くぎりぎりのところまで行かないとダメね」

相変わらず冷静なロディナの分析に、あたしは走りながらもぐりりとあたりを見まわしてみる。

（こっちのマスでも、このへんはやっぱり郊外なんだ）

あちらこちらに見える石は、お墓だろうか。

『癒しの大樹』に勝るとも劣らない巨木を中心に、それらは設置されているようだった。

「これ、お墓なのかな！？　だったら巻きこまないようにしないとっ」

そろそろ息も切れてきて、語尾が自然とあがった。

「そうね、あちらのほうに行ってみましょ」

答えたロディナが、方向転換をはかった、そのとき――

「！　ロディナ、前っ」

鋭く名前を呼んだのは、ジノラット。

そして言葉と同時に、ロディナの上に覆いかぶさるのが見えた。

（前からも魔符術が！？）

間一髪、ぎりぎりのところでよけたふたりが地面に転がる。

あたしはもう一枚魔符を取り出して、今度は前方に向かい素早く読みあげた。

（もしかして、やつらの仲間？）

魔符術を放ってから確認してみたけど、さっきの男たちとはまた服装が全然違った。どうやら新手のようだ。

「狙われすぎだろっ！」

ロディナを助け起こしながら、ジノラットが呆れたように叫ぶ。

「リユーイールンもこっちに来て、周りに効果のある魔符を使うわ」

「んっ」

巻きこまれては困るから、あたしもふたりの近くに駆け寄る。

あたしがさっき前方に放った魔符術は、相手が相殺しきれなかったらしく、体勢を崩しているのが見えていた。どうやら向こうはひとりのようだ。

今度は後ろを見ると、ちょうど追いついてきたヒゲ男とバンダナ男の姿が見える。

「アオマ――」

そこでロディナが読みあげた魔符は、使用者の周囲に竜巻を起こし相手を吹き飛ばす術だった。その有効範囲は広いものの、相手の動きをとめるのが主で、攻撃力はさほど高くないらしい。つまり時

間稼ぎの魔符術なんだ、次の展開を考える必要があった。

前後から挟まれたため、今度は横に進路を取りながら作戦を練る。畑の上とは違い、こちらの地面はからからに乾いていたから走りやすかったんだけど、その分追うほうも追われるほうもスピードが出るのでよけいに疲れる気がした。

「なんかしつこいんだけど、どうしよう!？」

(このままじゃいずれ捕まっちゃうよっ)

なにせガイトからもらった攻撃用の魔符も残り少ないし、長引けば長引くほど、魔符術戦の経験がないあたしたちのほうが不利であることはわかりきっていた。

そんなあたしの弱音に応えて、

「ふたりは飛ぶ魔符持ってるんだろ？ 行ってもいいぞ、あとは俺がなんとかする!」

ロディナがいるからか、やけに格好いいことを言い出すジノラット。

でも簡単に頷けるわけがない。

「あんたなんか、頼りなくてひとりでおいてけないわよっ!」

あたしがそう叫んだときだった。

「——きゃあっ!？」

声をあげたのは、いちばん後ろを走っていたロディナだ。

振り返ると、巨大な光の手に掴まれていた。

「なっ……なによこれえ!」

「ロディナ!」

ジノラットとふたりがかりでその手を引きはがそうとするけど、感触がまるでなく、どうすればいいのかさえわからなかった。そのうちに手がするりと動き出し、ロディナを逆方向へと引きずっていく。

(これ、誰かの魔符術!?)

こんなの見たことない!

巨大な手の戻る先は、おそらくその術を放った人物のもと——

「あいつ……あとから来たやつだなっ？」

ジノラットが忌々しげに呟いた。

そう、引きずられていったロディナを手にしたのは、前方から現れたひとりの男のほうだった。ヒゲ男・バンダナ男とは違い、シャツの上からでも鍛え抜かれた体躯がわかる。

「放しなさいよっ、このバカ力！」

片腕で抱えられているロディナはかなり激しくもがいているんだけど、びくともしないようだった。

そいつがゆっくりと歩いてくるのは、自信の表れか。

（やっぱりこの人も、ガイトの魔符を狙っているの？）

そんなに、強い力が欲しいのか。

そんなに……魔符を悪用したいのか。

——それならくれてやるわよ！

頭に血がのぼりまくったあたしは、遠慮なく例の魔符を取り出し大声で唱えた。

「アオマ・クラエネブレバシバノーアピっ！！（魔符術・金だらいよ、その高貴なる姿で敵を押しつぶせっ！！）」

その瞬間、恐ろしく大きな——それで人間を煮こむなら、千人は入りそうな——光の金だらいがロディナを捕らえている男の頭上に出現し、容赦なく落下した。

（わあああっ、ロディナにも当たっちゃう！？）

心配するあたしをよそに、ゴンッと鈍い音を立てたそれは、次の瞬間すぐに消え失せる。そしてこちらに駆け寄ってくるロディナの姿が見えた。巨大金だらいに潰された男は、どうやらたまらずに手を放したようだ。

「ロディナ……！」

勝手に使ってしまった罪悪感と、ロディナが助かった嬉しさで、名前しか呼べなかった。

あたしに、嬉しさのあまりかロディナが抱きついてくる。

（ロディナったら、珍しいな）

そんなに怖かったの？

敵がまだ倒れたままなのをいいことに、あたしもそつとロディナの背中に腕をまわした。

その、耳もとで。

「アオマ・コントウィーオウィザツキヤシャバスリマバー！（魔符術・鳥よ、その輝ける翼で東へ三マス導け！）」

（えっ！？）

魔符を読んだのはロディナだ。

驚いて首だけ動かすと、ロディナは確かにあたしの頭の後ろで魔符を手になっていた。

エイラさんにハンコを捺してもらっていた、学校に帰るための魔符を。

当然ガイトのところに行つたときと同じように、魔力でできた光の鳥が現れあたしたちをそれぞれの足につかまえる。

「ちよつ、待つてよロディナ、これ定員ふたりでしょ！？」

「ジノラットはどうするのよ？」とあたしが続ける前に、ロディナがそのジノラットに向かつて。

「あとは頼んだわよ」

まるで最初から計画されていたかのように、声をかけた。

言われたジノラットも嬉しさを隠しきれないような、だけどどこか緊張しているような、上気した頬を緩ませながら。

「——ああ、まかせとけっ！」

とんと自分の胸を叩いて、自信を見せた。

「ジ、ジノラット……？」

そこには、あたしがいつも見慣れていたおちやらけたような表情はなかった。

（一体どういうこと！？）

ジノラットはロディナが気になっていたものの、ロディナのほうはつい先日までジノラットのことを知らなかったはずなのに。今の言いかたでは、まるでジノラットのことをよくわかつているかのよ

うな――

「！　きゃあっ！？」

あたしの混乱になど興味の無い鳥が、不意に大きく飛びあがる。

「心配しなくても、たいした距離は飛べないわ」

同じようにくわえられているロディナがフォローの言葉をかけてくれたけど、どうせ飛ぶのだからあたしにとっては同じことだった。きつく瞳をつむって、手探りで見つけたロディナの手を遠慮なく握りしめる。

もう闇色をまといはじめている空は、来たときよりも風が強いらしく、魔力の鳥でもその影響を受けるのかひどく揺れた。そのせいで、身体に食いこんでくる爪が少し痛かった。

でも今ジノラットがおかれている状況は、そんな痛みよりももっときついもの。

（大丈夫かな、ジノラット）

三対三が一对三になってしまったんだから、やっぱり気になる。実際、あいつらが狙っていた魔符はもうあたしが使ってしまったから、ジノラットを襲う意味なんてなにもないんだけど、もしかしたらそのことにすら気づいていないかもしれないんだ。

やがて、ロディナが言っていたとおり、鳥はすぐに下降を始めあたしたちを地面におろしてくれた。くると来た方向を振り返って見ると、ちょうどマス目の境界が見える。半マス分くらいしか進んでいないようだけど、今は充分だ。

このあたりは意外と民家が並んでいて、暗い空から光るものがありてきたからと、あたしたちを覗きにきた人までいた。

「あ、どうも。お騒がせしてすみません」

変に騒がれるのが嫌だったから、あたしがそう適当にごまかして笑っていたら。

「――とりあえず、ひとつ北のマスに戻りましょ」

一方的に告げたロディナは、気にせず歩き出してしまった。目をやると、北の境目もまだ見えている。だから戻るのは、簡単

なことだ。

「ただどあたしは、そのあまりにも冷静すぎるロディナが気に入らなくて。」

（ジノラットをあっさりとおいてきてしまったことも）

「氣にくわなくて。」

「待つてよロディナ……せつかくガイトにもらった魔符を使っちゃったのは悪かったけど、なにもジノラットをおいてくることはなかったんじゃない!？」

ジノラットは確かに「任せておけ」とは言ったけど、それはロディナの手前の強がりだったかもしれない。自分は男だからと、我慢したのかもしれない。

あたしの言葉に、ロディナは一度足をとめ振り返った。意外にもそこに浮かんでいたのは――笑顔だった。

「魔符のことはいいわよ、捕まったわたしも悪いのだし。それよりあなた、幼なじみなのでしょう? 気づかなかった? あの子、魔符術戦に慣れているわよ。むしろわたしたちが足手まといたと思っただから、残してきたの」

「え――」

考えたこともなかった。

（ジノラットが、魔符術戦に慣れてるって?）

ほぼ直進しか知らないようなジノラットに限って、そんなことは――

「……あ」

でも考えはじめたら、なんとなくわかってしまった。

（ファッションだって言ってたあの包帯も、やっぱりケガによるもので）

覗きのためと言われていたあの双眼鏡も、今回のように相手の魔符を見たりするためのもので。

あたしがよく覚えていなかった『減力の法則』をしっかりと覚えていたことといい、それを効果的に利用する方法を知っていたことと

いい、ロディナの推測を裏づけられるものはたくさんあった。

たんにあたしが気づかなかっただけで。

「行くわよ」とあごで促して、もう一度歩きはじめたロディナに、今度こそあたしもついていく。

あたりはもうすっかり暗くなっていたけど、丸くて大きな月があたしたちを照らしてくれていたから、灯りは必要なかった。

「あの子の将来の夢って、なんだったの？」

確認するように訊いてきたロディナの言葉に、記憶を掘り起こす。

「……そういえば、『魔符術戦士』だったかも」

魔符をより効果的に使い、戦う者だ。

「ちゃんと勉強してるみたいね」

苦笑するように笑うロディナに、あたしは頷いた。

「うん——」

（そうよね、ジノラットにだって、夢があるんだよね）

あたしは自分の夢——立派な魔符職人になること、そのためにちゃんと卒業すること——に手一杯で、他の人がどんな夢を持って生きているのかなんて、正直忘れていた気がする。自分のことにはかり一生懸命で。

今となりにいるロディナが、あたしと同じ『卒業』に向かって頑張っているのは知っていても、その先になにを見ているのかも知らない。

（そこはあたしには関係ないから？）

——ううん、そんなことないよね。

ロディナにも目指しているものがあるのなら、無事に卒業できたときにその目標により有利なよう、今からでも動いていけるんだ。あたしがそれを理解していれば。

「ねえ、ロディナ」

思い切って、あたしはそれを訊いてみることにした。

「ロディナの将来の夢って、なあに？」

背中に問いかけてから、隣に並ぶ。

「なによ、唐突に」

歩く前を見たまま応えたロディナだったけど、嫌がってはいないようだったから。

「唐突じゃないよ。ちゃんと話の流れにのってるもの」

「じゃああなたの夢は？」

逆に問い返されて、あたしは声を張りあげる。

「そりゃあもちろん、魔符職人になることよ！」

ただ補足は、大きな声では言えなかった。

「ほんと、やっぱりオリジナルの魔符をつくってみたいんだけどね。あたしの頭じゃ無理だったのはわかってるから、せめて両親が戻ってきたときに、ふたりが考えた命令文をあたしが織れたらなくて」

それだって、今回こうしてロディナと一緒に行動するまでは、自信の持てないことだったんだ。言われた文章を記すだけなら誰だってできる、そう思うと、自分の夢に価値なんてないような気がしてだけ――

「ああ、あなた古代文字きれいに書くものね。それは向いていると思うわよ」

さらりと、ロディナは言ってくれた。

「そうやってロディナが褒めてくれたから、自信が持てたんだよ。学校の先生なんて見慣れてるからか全然褒めてくれないんだ」

「それは、汚いきれい以前に、あなたの解答がひどすぎたからじゃないの？」

「うー」

それも、まったく否定できなかった。

そこからはしばらく、ふたりして無言で歩く。

（ロディナの夢は、やっぱり教えてくれないのかな）

まだそこまでの仲じゃないから？

あたしに言っても、意味がないから？

もう一度訊いてもいいのか、迷っていた。

ちょうど北との境界を越えた頃、口をひらいたのはロディナのほうだった。

「——さっきの話だけれど」

「え？」

どうやらロディナは、話す言葉をまとめていたらしい。

あたしが横顔を眺めても、決してこちらを見ようとはせずに。

「わたしの夢は、あなたのご両親のような言語学者になることよ。

当然、古代語のね」

「！」

（ロディナ……）

「だからわたし、ずっとあなたのことが羨ましかった。すばらしいご両親に囲まれて、古代語を小さい頃から教えてもらえて——」

そこでロディナは、言葉とともに足をとめた。

数歩ロディナを追い越したあたしが慌てて振り返ると、やっとまっすぐに視線を向けてきたロディナが。

「でもそれは、今のあなたが抱えるさみしさを、すべて無視した感情だった。あなたがガイトに告げた言葉で、わたしはそれに気づいたの」

「え？」

「『さみしくない？』なんて問いは、自身がさみしいと思っていなければ出るはずのない言葉なのよ」

「！」

ずっとひとりぼっちだというガイトに、思わずかけてしまった一言で。

ロディナはそれに気づいてしまったんだ。

「あ、あたしだって！ ロディナのこと、こっそり羨ましいって思ってたんだよっ？ 同じルーンなのに頭すごく良いし、大人っぽいし美人だしいつも冷静だし——」

正面から交わしあう視線のなか、ロディナの口もとがふつとほころぶ。

「でもあなた、知らないでしょう？ わたしの家って貧乏の大家族なの。だから、さみしさは知らないけれど生活の限界は知っているわ」

「！？」

それはまったくの初耳だった。

「じゃあ、ロディナが古代語の言語学者を目指しているのって……」
ずっと、ロディナの長い黒髪が揺れる。

「そう、あなたのご両親に憧れていたというのもあるけれど、国王陛下に認められる言語学者になれば、家族も丸ごと保護してもらえるからよ。——今のあなたが、自由に生活できているように」

「……っ」

（ロディナにそんな事情があったなんて——）

あたしの前でだけじゃない。

学校のなかでもずっと強がりが続けていたロディナに、誰も気づかなかった。

抱えている問題の重さに、誰も気づけなかったんだ。

（恵まれている）

あたしだって、ロディナから見れば充分にそういう存在で。

あたしたちはお互いのうわべだけを見て、指をくわえていた。
バカなふたりだった。

「——エイラのところまで、戻るわよ」

なにも言えずに立ち尽くすあたしの横を、ロディナが追い越していく。

「やりなおしましょう……何度でも！」

その力強い言葉に、あたしはまだ諦めていないロディナの意思を見た。

「——うんっ！」

【第3章】誰のためのプライド - 1

もう一度ガイトのところに戻るのは、簡単なことだった。

しかしもう一度、ハンコをもらってもきつと同じように狙われる。少なくとも今のあたしたちには、ハンコをもらった魔符を最後まで守りきる自信がなかったから、作戦を変えることにした。

二日かけてエイラさんのところまで戻り、もう一度、東へ三マス飛べる魔符にハンコを捺してもらおう。

「これからどうするつもりじゃ？」

二度目の協力要請にも快く応じてくれたエイラさんは、あくまで移動の助けしか頼まないあたしたちを心配に思ったのか、そう尋ねてきた。

あたしは持っていた魔力士マツプを広げて、エイラさんに見せてみる。

「ロディナと相談してみたんですけど、お城にいちばん近い魔符術士が有利なら、このエムルトルドって魔力士はどうか？ って思ったんです。ただ、この人の名前の横に×マークがついてるのが気になって……」

お城と学校があるマスの、左隣のマスにいるその魔力士は、魔力の強さは下から二番目（つまり、ナルスさんとエイラさんのあいだ）になっていたけど、ナルスさんよりお城に近い分同等の力を発揮する可能性もあった。

チラリとこちらに目をやったエイラさんは、どこか含みのある笑いをシワいっぱい浮かべて。

「ああ、エムルは事情があってハンコが捺せない状態じゃからな」

「捺せない状態？ それはどういうことですか？」

「すごいケガでもしているとか？」

問いかけたロディナに続けて訊いてみたものの、自分でも「それはないな」と思った。だって魔力士はこうして、エイラさんやガイ

トみたいにずっと守られて存在しているのが常なのだ。どうすればケガをすることができるのか、考えても思い浮かばない。

（まさかお風呂場ですっ転んだなんて、ジノラットみたいなことはないだろうし……）

気になる。

エムル「トルドはなぜ、ハンコを擦せないんだろう？」

「——まあ、行ってみるのもよからう。おぬしらなら、なんとかやるやもしれんしの」

その、なんと煮え切らない答えに、あたしとロディナは思わず顔を見あわせた。

ナルス「チュリオットのところへ行つて、他の挑戦者たちと同等の魔力を得るか。

エムル「トルドのところへ行つて、先の見えない可能性に賭けるか。

最後の選択を迫られていた。

あたしたちはエイラの部屋を出たあと、前の階段をくだりながらさっそく意見交換をする。

「『いちばん強い魔符術』の、いちばん強い魔符は、これで充分だと思ふのよ」

ここに戻ってくるまでの二日間で、もう一度あたしが織りなおした魔符を、手もとでもてあそびながら告げたのはロディナ。さらに続ける。

「一マス移動していて、しかも魔力の減りが多い定率法だったのに、あの威力よ？ ガイトがわざとそちらを選んだのは、わたしたちが狙われることを予想していたからと、お城に至る前に使ってしまったときに、うっかり人を殺してしまわないように——だったのね、きつと」

「げっ」

言われて、ぞっとした。

（そっいえばあの金だらいの下敷きになった人、全然動かなかった

もんね)

大丈夫だったのかなと、今さらながらに心配になった。

襲われたからとはいえ、いきなり殺人犯になってしまうのは冗談じゃない。

「魔力が強ければいつでもでもないんだね」

改めて感じたことを改めて口にしたら、ロディナに鼻で笑われてしまった。

「なによ」

ロディナを追い越し階段を駆けおりて行って、いちばん下で振り返る。

「ロディナ、どっちに行きたい？」

見あげて訊いたら、ロディナは。

「あなたは？」

「みんなが行かないほう」

正直に答えたら、また笑われた。

「ロディナ？」

「仕方がないわね。おとなしくついて行ってやるわよ」

「！」

「エイラ」ポットもはつきりと否定しなかったのが、気にかかるから

「『おぬしらなら、なんとかなるやもしれんしの』？」

エイラの真似を試みたら意外に似ていたようで、ロディナは「ぶっ」とふきだしたあと。

「リユーイ＝ルーン、あなた、ちゃんと他にも特技があるじゃないの」

喜んでいいのかわからない褒め言葉をくれた。

違和感は、きっと最初からあった。

移動の魔符で学校のある中央のマスまで戻り、休む間もなく東へ
―マス移動した、あたしたちを待っていたものは。

森の木々でつくられた迷路に、巧妙な罠。

（どうしてここまで、人を寄せつけないようになってるの？）

エイラさんだってガイトだって、確かに街からは離れた場所に住
んでいたけど、こんなふうに隠されたりはしていなかった。

何度も身の危険を感じながら進むうち、いつもは冷静なロディナ
も眉間のシワを隠せない。

「どうということなのかしら？　これ」

何度も同じ場所を通り、何度も同じ罠に引っかかりそうになりな
がら、少しずつ屋敷へと近づいてはいるんだけど――

「もしかして、エイラさんに二回も頼っちゃったから、おしおき、
とか？」

自分で口にしたくせに、身震いした。

「まさか」

応えるロディナの声も、しかし笑いきれていない。

（まだ朝だから明るくていいけど、これ夜になっちゃったら普通に
出られなくなりそうだよ……）

それまでにはなんとか、屋敷にたどり着いて目的を達成してい
いたところだ。だってこの森では、帰ることすら大変そうだから。

その後やっとあたしたちが屋敷へとたどり着けたのは、お昼をま
わってからだった。

「あつた！　門が見えてきたよっつ」

他の屋敷同様立派な格子門が見えて、思わず指差し叫んだ。本当
は飛びあがって喜びたいところだったけど、あまりにも長い時間森
をうろついていたせいか、足の疲れがひどくてそんな余裕もなかつ
た。

（屋敷のなかでちょっと休ませてもらおうかな）

持ってきたパンとかも、食べる気になれず手をつけないままだ。
休んだあとなら食べられるかもしれない。

勝手にそんなことを期待して、門のほうへと近づいていく。

——また、違和感。

「待ちなさいリユーイールン。様子がおかしいわ」

「え？」

「門番がいな——いいえ、門番が倒れている！」

「!？」

さらに近づいたらわかった。ロディナの言うとおり、門番たちが門の脇のほうで倒れていたんだ。しかもその腰に、魔符を入れておくファイルブックは見あたらない。

「もしかして、襲われて魔符を盗られた？」

（だったら今、なかにいる人は……!？）

頭がまわらない。

とつさに状況を理解できない。

そんなあたしを嘲笑うかのように、さらなる変化が訪れる。

「……せつて言ってるべ!？ おらなんか連れでつても、なんの得さもなんねえつてば!」

最初に聞こえたのは、まだ幼い声。それから屋敷の正面玄関がひらき、複数の男たちが飛び出してきた。うちひとりの男の腕には、さっきの声の主だろう小さな子どもが拘束されている。

「——もしかして、誘拐？」

大きく目を見ひらきながら、呟いたのはロディナだ。手は自然にファイルブックへと移動している。

「じゃああの男の子が魔力士!？」

あたしがあげた声に、格子門へと近づいてきていた男たちもこちらに気づいた。

「なんだっ？ おまえたちは!？」

向こうも興奮しているのだろう、走っているという理由以上に声がうわずっている。

「そ、それはこっちのセリフよ! 国によって保護されてる魔力士に、あんたたちなにしちゃってるのよ!？」

魔符術が格子門のなかまで届くのかはわからないけど、あたしも魔符を構えた。今ははったりでも必要だ。

しかし、あたしたちがまだ若い小娘だからだろうか。相手は逆に冷静さを取り戻していくようで、やがて格子門を挟んだすぐ近くまでやってきた三人の男たちは、ニヤニヤと嫌な笑みを浮かべていた。（なんなの、この人たち……）

この国ではまったく見たことのない服装だった。いや、服というよりもむしろ、生地を身体全体に巻きつけているような——どちらかというとガイトの服装に近かった。

「邪魔をする気か？」

鋭い視線と低い声で訊かれ、さすがにたじろぐあたしの横で。

「悪いけど、わたしたちもその子に用がありますので」

凜と答えたロディナは、そのまま魔符を読もうとした。

「アオマ——」

「ダメっ、逃げで——！」

それを遮って叫んだのは、魔力士の子ども。

次の瞬間——

「……あっ!？」

突然背後から襲われた感覚に、あたしたちはうまく対応できなかった。

（なに、これ）

身体にまとわりついてくる、この妙な空気は。

これも魔符術？

動かしにくい身体をそれでもなんとか動かして、振り返ったあたしが目にしたのは、誘拐犯三人と同じ格好をしたひとりの男だった。

（後ろにも仲間がいたんだ——）

やがて、それ以上のことは考えられなくなって。

視界の端で倒れるロディナを目にして。

やがてあたしの意識も飛んだ。

子どもの泣き叫ぶ声が、聞こえた気がした。

【第3章】誰のためのプライド・2

「——イ、リユーイーールンっ、起きなさい！」

呼ぶ声はわかった。

でもまどろみのなかにいるのが気持ちよくて、無視した。

あたしの足もとを、ロディナが容赦なく蹴飛ばしてくる。

「いたっ……ちょ、スネを蹴ることないでしょ!？」

やっと目をあげたあたしは、やっと自分のおかれている状況を思い出す。

「……ここどこ？」

「遅いわよ、まったく」

呆れたように呟くロディナの顔が、すぐ近くにあった。逆にいえば、近くにあったからこそ薄暗くてもちゃんとわかったんだ。

(手足ともに縛られてる、か)

後ろ手に縛られた手は自分では見えないけど、おそらく足と同じロープで縛られているんだろう。だとしたらふたりいればなんとか取れないこともないのに、あたしたちが同じ場所に閉じこめられているのはやはり、女ゆえに相手が油断しているせいなのかもしれない。

冷たい木の板に頬をあわせて横になったまま、ロディナに状況を確認する。

「あたしたちつて、エムルくんを誘拐しようとしてたやつらに捕まっただよね？」

「おそらく、ね。催眠系の魔符術を使われていたことに気づかなかったのが敗因だわ」

前にばかり集中していたあたしたちは、後ろに相手の味方がいるなんて可能性をまったく考えていなかった。ある意味それくらい気が動転していたんだ。

そして、

「でもさ、一緒に連れてこられたんなら、まだ助けるチャンスはあるよね？」

そう、助けたいと思っていた。

（面識なんてないもない、今日初めて見たばかりの間柄だけど）

それでもあの子はあたしたちに、「逃げて」って言ってくれた。

「助けて」じゃなくて、「逃げて」と――。

「ふっ」と、すぐ近くにいらからこそロディナの息を吐く音が聞こえた。

「相変わらずあなたは、恐ろしいくらい前向きなのね」

褒めたんだかけなしたんだかわからない言葉をかけてくる。

それから、

「いいわ、とりあえず手のロープを外しましょ。お互い後ろ向きになつて」

「うんっ」

ふたりしてごろん転がって、身体の向きを変えてから、上半身や膝をうまく使って再びすり寄った。後ろ手にまわされた手と手が触れあう。

「先にわたしがあなたのを外すわね」

「多分そうじゃないと先に進まないと思う！」

了承のかわりにそんなことを言ったら、からかうように指先をつかれた。

それからごそごとロディナが手を動かしているあいだ、あたしはやつと落ちついて室内を見まわすことができた。

（ここ、別に牢屋ってわけじゃないんだよね）

小さな灯りがひとつ、それも高い位置にあるせいで、部屋全体がはつきりと見えるわけではないけど。木目の床はひどく軋んでいてなんだかすぐに壊せそうな感じだったし、部屋の隅には一般の家庭にありそうな机が置いてあり、牢屋というよりも勉強部屋みたいな雰囲気だった。

（部屋が足りなかったのかな？）

あたしたちと遭遇してしまったのは、明らかに予定外だったろうから。あの男の子用の部屋しか用意していなかったのかもしれない。（そうだ、あの男の子——）

まだ幼い魔力士の、エムルくん。

きつとこの国の出身ではないんだろう、燃えるような赤い髪をしていた。聞き慣れないなまりも使っていたっけ。

（大丈夫かな）

乱暴なことされてないといいな。

そもそもなぜあの子が狙われたのか、あたしにはよくわからなかった。

世界中で魔力士の存在が重要視されていて、『魔力士の数が国力を決める』とまで言われているけど、実際は低位の魔力士をいくら集めたってあまり意味はないんだ。彼らの役目はエイラさんを見ればわかるとおり、一般国民が使う魔符をつくることであって、国を助けることじゃない。国を守りたいなら、それなりの力を持った魔力士でなければ。だから、エムルくんみたいにそんなに力のない魔力士を連れていったって、それが国のためになるとはとも思えなかった。

（連れていくなら、ふてぶてしいガイトにすれば良かったのに）

もっとも、力の強い魔力士であればあるほど、近づくことすら難しい。だからこそエムルくんを狙ったのかもしれないけど……なんだか納得がいかなかった。

「よし、終わったわよ」

聞こえた声に、あたしは我に返る。

同時に、手首に食いこんでいたロープがさらりとほどけ、あたしの両手は自由になった。

「ありがと！ ロディナ」

「足のロープは自分で外してよ？ それで机から、なにかロープを切るのに使えそうなものを持ってきて」

やっぱりロディナも不自然な机が気になっていたんだ。——うう

ん、今ここで不自然なのは、むしろ囚われているあたしたちのほうか。

「ロディナ、そんなにあたしの指先が信じられない？」

自由になった腕を使って、身体を起こしながら訊いてみたら。

「何日も一緒に寝泊まりしてれば、嫌でもわかるのよ。自分でボタンもとめられないくせに」

「うっ」

またしても、全然否定できなかった。

そしてやっぱり、自分の足首のロープすら、外せなかった……。

「もう~~~~っ、こうなったら這ってでも行つてやる！」

仕方なく、足を拘束されたまま机のほうへと向かう。最初はぴよんぴよん飛び跳ねていこうとしたんだけど、音が立つと誰かくるかもしれないからとロディナにとめられたのだった。

なんとか机のそばまでたどりつき、引き出しのなかをあさってみる。

「あ、なんか文房具がいっぱい入ってるよー」

「紙とペンはある？」

「うん」

「じゃあそれも持ってきて。ファイルブックは取りあげられたようだから、念のため新しい魔符を織っておきましょう」

「え？ でもハンコもらわなきゃ使えないじゃない」

「あなたねえ……」

そこでロディナが一度区切ったから、あたしは引き出しから顔をあげた。

「なに？」

「助けたいのは、誰なんですっけ？」

「誰って、魔力士のエムルくん——あ、そっか」

（無事に助けられたら、その場でハンコをもらえばいいんだ！）

そんなことすらとっさに思い浮かばなかった自分に、少しめまいがした。

やがて引き出しの奥からペーパーナイフを発見し（さすがにナイフそのものはなかった）、紙とペンも携えてロディナのそばへ戻る。

「いい？ リューイールン。まずはロープの先を見つけて、そこから結び目をたどっていくのよ。ペーパーナイフがある分、指が入らないきつい隙間でも広げやすいはずだから、根気よく頑張つて！」

ロディナに励まされ、その手首に巻かれたロープ外しを試みる。あたしの足首に巻かれたものは、ロディナの手が自由になってから取ってもらったほうが早いということで、あとまわしになったのだった。

（うっ、なんなのこの結び目……）

複雑に絡まったロープは、まさしく迷路だ。

「ロディナ、見えない状態でよくこんなの解いたね」

後ろ向きでやり遂げたロディナに、改めて感心する。

するとロディナは、珍しくなにかを言いよどんで。

「……ロープで、よく遊んでいたから」

「え？」

「手づくりのテントをつくったり、ハンモックみたいなをつくったり、縄跳びをしたり、あやとりをしたり。お金のかからない遊びなら、家族みんなでなんでもやったわ」

「そう、なんだ」

普段のロディナからは、まるで想像できない一面だった。

手を動かしながらも、あたしはロディナに続きを振ってみる。

「何人家族なの？」

「十人」

「うわっ、ほんとに多いね。ロディナは何番目？」

「いちばん上よ——って、ちゃんとやってるの？ リューイールン」

「大丈夫だよ！ ペーパーナイフのおかげでやりやすいから」

「そう、ならいいけど」

ロディナは一度そこで切ったあと。

「それにしてもわたしたち、緊張感ないわよね」
そんなことを言い出した。

確かに、襲われて知らない場所に連れてこられた割に、不思議と落ちついている。

あたしはそれに気づかないほど自然体だった。

それは考えるまでもなく、こうしてロディナと一緒にいるからだ。
「ロディナが良い案を考えてくれるってわかってるから、あたしはそれを活かすように動くだけだもん」

「相変わらずの他力本願なのね」

「自分の役目くらいはわかってるつもりよ！　そういうロディナは、なんで落ちついてられるの？」

「わたしは——」

時折言葉を切って、続きを探すロディナ。

それはおかれている環境からついた癖なんだろうか。

「あの人たちがわたしたちを生かして連れてきた以上、わたしたちに利用価値を見出しているのは明らかだから」

「うわ、全然良い理由じゃなかった！」

「あたりまえでしょ。それにあなたには、もっとかなしいお知らせもあるのだから」

「え……な、なに？」

ロディナがそつと声をひそめたから、あたしはつい手をとめてしまった。

当然ロディナはすぐそれに気づいたのか。

「そのロープを外しおえたら、教えてあげる」

「ちょ、なによそれっ。怖くてロープと遊んでる場合じゃない！」

「いいからさつさと外しなさいよ。そろそろいい加減手が痛いわ」

「う、わ、わかった。急いでやるからもうちよつと待ってっ」

そこからは会話せずに、必死に手を動かしだした。

そのおかげでやがて、ちゃんと外すことはできたんだけど——

「じゃあ言っけど」

ロディナの続きが、怖い。

寝転がったままくりとこちらに身体を向けたロディナは、やけに神妙な顔をしていて。

「ロ、ロディナ……？」

「いろいろ考えた結果、今わたしたちがいるここ、きっと飛行船のなかよ」

「な——」

飛行船といえば、空気力で空を飛ぶという乗りものことだ。それくらいはあたしも知っていた。飛行船が空を飛ぶようになったのは、あたしが小さい頃の話で。初めてそれが空を飛ぶ日、あたしも乗る予定だったんだけど、熱を出してお流れになったのだった。それ以来、まるで縁のなかった奇跡の乗りもの。

（じゃあ今、空の上にいるってこと！？）

自分が高所恐怖症だなんて知らなかった数日前なら、無邪気に喜べたかもしれない。

でも今は——

「ごめんロディナ、泡ふきそう……」

「そう、そのまま黙ってなさいな。今のうちにわたしが足のロープを取ってあげるから」

ロディナは当然この反応を予想できていたんだろう、あたしが静かになったのをいいことに、身体を丸めてあたしの足のロープを解きはじめた。

（空の上、雲の上、地上の上……ほんとに浮いてるの！？）

まったくもって信じられない。

そういえばたまに揺れるから、なにか乗りものに乗っているのかもとか、工場の近くにある建物なのかとか、そういうことばかり考えていたけど。もし本当にここが飛行船のなかならば、なるほど、人を閉じこめておくような場所がないのも頷ける。

そうしてあたしが放心しているうちに、さっさとロープを取りお

えたロディナは、今度は自分の足のロープを外しはじめる。

「ね、ねえ……ロディナはどうしてここが飛行船のなかだったの？」

尋ねてみたら、一度だけチラリとこちらを見たロディナは。

「答えるから、そこにある紙とペンで簡単な攻撃魔符を織ってちょうだい」

それだけ言うと、再び手もとに視線を戻した。

（そうだ、なんかのんびりしちゃってるけど、いつ人が来るかなんてわからないんだった）

あたしは慌てて自分の手もとにそれらを引き寄せると、言われたとおり自分が記憶できている魔符を織りはじめる。魔符で大事なものは、織りこむ命令文とハンコだけであり、それ以外の素材はどんなものでも構わないから、いくらでも代用が可能なのだった。いつも同じサイズの紙に書いていたのは、統一されていたほうが保存が楽だからだ。

薄暗いなか、目を凝らしながら一文字ずつ丁寧に織っていると。

「うんと小さい頃に、一度だけ乗ったことがあるから」

ぼつりとロディナが呟いた。どうやらさっきの問いの答えらしい。「ふうん？」

（飛行船に乗るなんて、お金がかかりそうなことなのに）

なんだか意外に思えたけど、今はそれどころじゃない。

ロディナの手もとを見ると、ロープ外しにすっかり慣れたのか、もう取れそうな状態だった。あたしも早く魔符を完成させてしまわないと！

そうしてひとりに三枚ずつ、全部で六枚の魔符を織りこんだ。これらは魔力士にハンコをもらえなければなんの役にも立たないものだけど、あるだけで少し心が落ちつくから不思議だ。

（普段からずっと接してたからかな）

それとも、愛しい両親が残してくれた古代語が、ここにあるからだろうか。

なにものにも代えがたい、お守りのように思えた。

ロディナの分である三枚を手渡すと、さっと目を通したロディナは。

「もう一枚、今から言う魔符を書いてくれる？」

「いいけど、それじゃあ足りなかった？」

「足りないというかね。これじゃあエムル＝トルドを助けられても、この船から逃げる方法がないじゃない」

「あ——」

言われてから、気づいた。

（そうよね、今は空の上なんだから……）

逃げるには、それ相応の準備が必要だった。

自分が空中に投げ出される場面を想像してしまつて、あたしは思わず震える。鳥に運ばれただけでもああなのに、もっと高い場所から、しかも落ちるなんてありえない！ 心臓が縮こまりすぎてどうにかなつちやいそくだ。

（そうならないために、逃走用の魔符を織っておかないと！）

頭のまわるロディナに、心から感謝した。

それからふたりで相談しつつ、最後の魔符を織りこむ。これまでに何度も頭をつきあわせて文章を考えているせい、お互いの好みや考えがわかってきたし、考える手順も共通のものが生まれて、以前よりずっと早く意見がまとまるようになっていた。

「うんっ、この魔符術なら、あたしでもロマンチックで耐えられそう」

「どうせずっと目をつむっているくせに？」

「く……っ」

ロディナはいつも、言い返せないことばかり突いてくる。

「ロディナったらほんと意地悪なんだから」

それでも嫌いになれないのは、言ってしまったあと瞳の奥でそつと後悔していることに、なんとなく気づいてしまったから。

（何度も言われて）

そのあと一緒にいて。

それを何日かくり返して。

やっとわかった。

そこまでつきあわなければ、わかるはずのなかった、心の裏側――

「……！」

そのとき不意に、扉の外で誰かの足音が聞こえはじめた。

廊下も室内と同じ木でできた床なのだろう、こつこつとノックをするような音が、少しずつ大きくなってくる。しかも二つ――いや、三つか。もしかしたらあるときエムルくんを誘拐した三人かもしれない。

顔を見あわせたあたしたちは一度頷きあってから、それぞれ魔符を服の内側に隠した。紙だからどこに入れても自然に隠せるのが、魔符の良いところでもある。まだハンコを捺していないものなら、誰の声にも反応しないから問題もない。

それから部屋の奥にふたり身を寄せあつて、しゃがみこんだ。相手がひとりだったらつかみかかるのも有効な作戦だったかもしれないけど、三人ではさすがにきつい。

やがて足音は、予想どおりこの部屋の前でとまり、カチャリと鍵が外される音がした。

（あ……）

そつえばあたしたち、扉が閉まっているかどうかも確認していなかった。落ちつけているように見えて、やっぱり心の奥ではかなり動転していたんだろう。

ロディナに目を向けると、同じように苦笑していた。

ひらかれた扉から入ってきたのは、思ったとおり例の三人だ。

「さすがに起きていたか。どうだった？ 深い眠りの味は」

あるときエムルくんを抱えていた、ひときわガタイのいい大男が顔を歪ませ訊いてきた。

（深い眠りの、魔符術だったんだ）

どつりでまったく夢も見ず、こんな場所に連れてこられても気づ

かないはずだ。

「あなたたちは何者なの？ なぜ、低位の魔力士を狙うのです？」
相手の問いを無視して、声をあげたのはロディナ。相変わらずの
いい度胸だけど、怖くないはずがないことを、あたしはもう知って
いたから。自分から手を伸ばして、そばにあるロディナの右手を握
ってあげた。

それに気づいたロディナの目が、一瞬あたしをとらえたけど――
「ハッ、低位の魔力士だって？ もし本当にそうなら、そもそもて
めえらの国だってあいつを受け入れたりしなかっただろうさ」

「――え？」

男の思いもよらない言葉に、あたしたちの視線は再び前へと戻っ
た。

（それって、どういうこと？）

エムルくんは低位の魔力士じゃないの？

他の国から、連れてこられたの？

エイラさんは、「エムルは今ハンコが捺せない状態だ」って言っ
てたけど。

そのこととこれは、なにか関係があるんだろうか？

（ダメ、あたしにはなにも思い浮かばない！）

だいいち、一言も言葉を交わせなかった相手のことを、そう簡単
に理解できるわけがないんだ。

ぎゅっと、今度はロディナのほうから手を握りしめてきた。

「いいねえ、その動揺した顔。どれ、じゃあ本題だ」

中央の大男はそこで一度切ると、両脇に控えているふたりにそれ
ぞれ目配せをして。

「てめえら、魔符術学校の生徒ならそれなりに魔符が書けるんだろ
う？ どちらが優秀だ？ エムルの力を試すための実験台に使って
やろう」

「！？」

告げたとたんに、両脇から下っ端の男たちが近づいてくる。捕ま

える気だ！

（どっちが優秀か、ですって？）

そんなの、ロディナに決まってる。でもそんなふうに言われてロディナを出すわけにはいかないんだ。あたしはそれほど薄情じゃない！

「――」

息を吸って、叫ぼうとした。

けれど意外にも、それを腕で制してきたのは――

（ロディナっ！？）

「わたしのほうが優秀です」

ロディナは少しの戸惑いもなく繋いでいた手を離し、立ちあがった。

「『成績が悪いほうのルーン』なんかと比べないでください。比べるまでもないことですから」

「ロディナ……」

確かにそのとおりだ。でも、実際にそう口に出されると、どこかなしい。

「ほほう？」

興味深げに目を細める大男。そのあいだにも下っ端の男たちがさらに近づいてきて、ロディナの腕を両脇から掴もうとした。

しかし、

「触らないで！」

迫力のある声でロディナに制され、伸ばす手をとめる。

「抵抗なんてしません。自分でちゃんとついていきますわ」

気取ってすらいるような、ロディナの後ろ姿。

（ロディナ、今どんな表情をしてるの？）

無理に微笑んでいるんだろうか？

それとも、無表情を装っているだろうか？

今あたしが「本当はあたしのほうが優秀です！」と言い出すのはたやすい。でもこのロディナの、凜とした気高い雰囲気には勝てるは

ずもない。こいつらがどちらを信用するかは、他のなにを見るよりも明らかだった。そしてそれは、あたしがルーン夫妻の娘だと言ったところで同じだろう。証拠はなにもないのだから。ロディナを助けるための嘘と、思われて終わりだ。

でもやっぱり、おとなしく見送ることもできなくて――

「ロディナっ!？」

半分は悲鳴のような声で呼んだら、ロディナは振り返ってくれた。
(えっ!?)

そこに浮かんでいたのは、今までになくやさしい笑顔。

「ごめんなさいリユース・イルン、わたくし、やっぱりプライドを捨てられない」

(どんな場面であれ、あたしより下に見られたくないって?)

ちくりと痛むのは、一体誰の胸なのか。

「あなたのように、がむしゃらにはなれないの」

「――っ」

なにも言えないあたしの目の前で、ロディナは自分の首につけていたペンダントを優雅な動作で外した。

それから――

「一度くらい、わたしにも良いところを見せるチャンスをちょうだいな」

「!」

終わる言葉とともに、ぽんと投げられたペンダントがあたしの胸もとまで飛んでくる。

(ロディナ……!)

違うんだ。

自分のためじゃないんだ。

あたしのために、そのプライドを――

「ふっ」ともう一度笑って、ロディナはくるりと向きなおる。

「さあ、行きましょう」

「お、おうっ」

ロディナの妙な迫力に圧されたのか、慌てたような返事をした大男がまず部屋を出ていった。そのあとにロディナ、そのあとに下っ端ふたりが続き、扉は再び閉められる。ガチャリという音も忘れなかった。

薄暗い空間にひとりきりになって、あたしは考える。

（さあ、どうする？）

ロディナは自分を犠牲にしてあたしを守ってくれた。きっとロディナはこうなることを予想していたんだろう。

あたしがなぜ落ちついていられるのか訊いたとき、ロディナは言った。

『あの人たちがわたしたちを生かして連れてきた以上、わたしたちに利用価値を見出しているのは明らかだから』

つまりその利用価値が、『魔符術学校の生徒である』ということだったんだ。

そしてそれならば、優秀なほうがいいに決まっている。

きっと魔符を織らされるんだ。

エムルくんの力を試すと言っていたから、それにハンコを捺して

（……ま、待つてよ？）

そこまで考えて、あたしはひとつ肝心なことを思い出した。

「ロディナが織った魔符って、ロディナにしか読めないんじゃないの！？」

思わず口に出してまで確認する。

古代文字があまりにも下手すぎて、卒業論文を突き返されたほどのロディナだ、古代語を読み慣れていない人がそう簡単に読めるわけがない。でも威力を試すということは、ハンコを捺したあと誰かがそれを読むはずで。もしそれが読めない字であつたなら、最初からハンコを捺すとも思えないし、結果役に立たないということになるだろう。もしかしたら、ロディナがふざけて変に書いていると思われる可能性だってあるんだ。

（そこまで先のことを、ロディナが考えなかったはずはないよね…）

さっきロディナから受け取った手のなかのペンダントを、ぎゅつと握りしめる。

握りしめてから、ふと。

「！」

そのペンダントが、ふたりで学校を出発したその日に、酒場にいたロディナが握りしめていたものだ気づいた。

（寝るときも外さなかったのに）

いつもは制服の内側に隠して見えなかったけど、着替えるときに何度か見かけていたんだ。だからおしゃれのためにしているんじゃないくて、大事なものだから身につけているんだろとは思っていた。

（どうして今、置いていったの？）

まるでお別れを告げられているようで、考えたとたんに涙がにじんだ。

少し厚みのある、楕円形の金のペンダント。

なかになにかが入っているんだろうか？

横を見たらあけられそうな溝があつたから、爪を差しこんでみた。（そうよ！ ロディナのことだもの、ここに切り札になるような魔符が入ってるかもしれないじゃないっ）

わざと明るい考えを思い浮かべながら、ひらく。

「——えっ？」

なかから出てきたのは、ペンダントと同じ楕円型に切り抜かれた一枚の写真と。丁寧に折りたたまれた一枚の紙。

あたしの目を先に奪ったのは、小さな写真のほうだった。

（これ……あたしの両親と、小さい頃のロディナ！？）

一体どうしてそんな写真があるのかはわからないけど、あたしの両親の真ん中に六歳くらいのロディナが立ち、こちらに笑顔を向けている写真だった。しかも背景に映りこんでいるのは、小さいけど

飛行船だ……！

（一体どういうことなの？）

ロディナを飛行船に乗せたのは、あたしの両親？

確かにあたしの両親は、古代語に関する新しい発見があれば、あたしをおいてどこにでも出かけていくようなふたりだった。でもそれは大抵二・三日の話で、いつもお土産をたくさん買ってきてくれたから、最初はさみしくて泣いていたあたしも、だんだん帰ってくるのを楽しみに待てるようになったんだ。

そんな旅の途中で、偶然ロディナと出会って、なにか縁があつて一緒に飛行船に乗ったのかもしれない。それをロディナが今も感謝しているとしたら、ロディナがあんなにもうちの両親を尊敬しているふうなのも頷ける。

勝手に納得したあたしは、今度は細かく折りたたまれた紙のほうをひらいてみた。

そこにあつたのは、見慣れたバートチャ（ママ）の字で――

『あなたの夢が叶いますように』

古代語でそう、書いてあった。

（ロディナ……！）

ロディナはずっとこれを支えに生きてきたんだろうか？

紙のところどころ水滴が落ちたようなシミがあるのは。

つらさを外には出さずに、このペンダントのなかに隠していたからか。

「ロディナの、プライド……」

部屋を出ていくとき、ロディナがあたしに告げた言葉。

簡単にそれを「捨てろ」と言っていた自分は。

ロディナが自分のためだけにそれを保ちつづけていると、勝手に誤解していた自分は。

（なんて浅はかだったんだろう？）

こんなときなのに、あたしは思った。

あの凜とした姿に憧れていた自分は、決して間違いではなかった、

と。

【第3章】誰のためのプライド・3

それからしばらくして、あたしも部屋から出されるときが来た。

（ロディナの字が読めない以上、そのうちあたしを迎えにくるだろう）

予想していたから驚かなかったし、覚悟はできていた。

連れていかれるのはおそらく、ロディナがいるところ——それはつまり、エムルくんのいるところでもある。

（これはチャンスよ！）

そう自分に言い聞かせ、心を奮い立たせた。

今自分が空の上にいることなんて、もうどうでもよくなっていた。そんなあたしを迎えにきたのは、大男ひとりだった。

「てめえもあつちの姉ちゃんも、おとなしく従いすぎて気持ちが悪いな」

そう言いつつも下っ端を連れてこなかったのは、当然それを見越してのことなんだろう。

「そんなの、エムルくんを助きたいからに決まってるじゃない！」

小さな光が揺れる狭い廊下を、大男の後ろについて歩きながら背中中に叫んでやったら、大男は飛行船が揺れそうなほど大声をあげて笑った。

「はっはっは、バカ正直だな。魔符を織れたところで、ハンコがなければなんにもできんくせに」

確かにそのとおりだ。

でも——

「あんたは知らないかもしれないけどね！ 魔力士だって魔符を織る人がいなかったら役立たずなのよ！！」

「！」

ぴたりと、大男は足をとめた。

（でもこれだって本当なんだ）

魔力士は自分で魔符を織ることを許されていない。許していないのは国の定めでもなく世界の理でもなく、魔力そのものだという。

だから魔符を織れる人がいなくなれば、その時点でこの世界から魔符と魔符術が消えることになる。魔力士は確かに大切な存在だけど、彼らがいればそれでいいというものでもないんだ。

「あんたたちがなにを考えてるのは知らない。でも、どんなに良い魔力士を集めたって、その力を生かせる魔符職人とか魔符術士がいなかったら、宝の持ち腐れなんだからね！」

背中に言い捨ててやると、言い返すためか大男が右側からゆっくりと振り返ってくる。

（今だ！）

その隙にあたしは、左側から大男の横をすり抜けて走っていった。

「！ 待てっ！」

「待つもんですか！」

もちろん逃げようとしたのではない。早くロディナのところに行きたかったんだ。

狭い廊下はずっと一本道で、迷うことはなかった。どうやらそれほど大きな飛行船ではないようだ。

（みんな一緒にいるならきっと、いちばん広い部屋よね）

だとしたら、廊下の突き当たりがやすい。

すぐ後ろから大男が追いかけてきていることもあって、あたしはひたすらまっすぐに走った。そしてたどりついた扉を戸惑いなく押しあけて――

「！ ロディナ！？」

さっきまであたしがいた部屋の、十倍ほどの広さの部屋がそこにあった。部屋の壁にはいくつかの丸い窓もついていて、ここが間違はなく空の上であることを教えてくれる。

そんな部屋の中央で横向きに倒れているロディナは、明らかにぐったりとしていて、露出している脚や腕のあちこちにアザができていた。ロディナのそばに立っている男がムチを持っていたから、そ

れで殴られたのかもしれない。

あたしは慌てて駆け寄ろうとしたけど、追いついた大男に腕を捕まえられてしまった。

「っ放してよ！ あんたたちロディナになにしたのよっ！？」

腕を振って暴れるけど、当然のように大男はびくともしない。それどころかあたしを引きずるようにして部屋の中央まで運んでいく。部屋の最奥は少し高くなっていて、そこにまるで国王陛下が座るような、赤と金で彩られた立派な装飾の椅子が置かれていた。その上にちよこんとエムルくんが座らされていて、動けないようロープで縛りつけられているのが見える。おまけに口もと、見たこともない装置でふさがれていた。

（ひどい……！）

「ふたりが一体なにをしたっていうのよ！」

思わず叫ぶけど、室内にいる男たちはみんな一様にニヤニヤと笑うだけで、誰も答えてくれなかった。明らかにこの状況を楽しんでいるんだ。

（なんなのよこいつら……）

本当に気持ち悪い。

同じ人間なのに、考えが理解できない。

「——リユーイルーン……」

ふとか細い声で名を呼ばれて、視線を左下に振った。

倒れたままのロディナが、身体を捻るようにしてこちらを見ているのが目に入る。

「ロディナ、大丈夫なの？」

大丈夫じゃないとわかっていても訊いてしまった。

そんな声しかかけられない自分を情けなく思いながらも、ロディナの答えを待つ。

するとロディナはなぜか、自嘲気味に口もとを歪ませて。

「困っちゃうな……わたしがどんなに本気で書いていると言っても、信じてもらえないのよ」

「！」

（やっぱりロディナの字が読めなかったんだ……）

「キツ」と、ロディナのそばに立つ男に鋭い視線を飛ばしてやつたら、ムチを手にしているその男は「やれやれ」と大袈裟に呟いて「何度言ってもこちらが望む魔符を書いてくだらないのでね、私も叩きたくないものを叩くはめになっているのだよ」

変に丁寧な言葉遣いなのがまた、逆に腹立たしい。

「わたしはちゃんと書いているわよ！ ただ極端に字が下手なだけだつて言ってるでしょ！？ その子に訊いてみればよくわかるわっ」叫んだロディナは、身体が痛むのだろう、顔を歪ませて自分の身体を抱きしめていた。

不意にぐいと、あたしを捕まえている大男に前を向かされる。

「——というわけで、てめえをここに連れてきたというわけさ」

（！）

耳もとで呟かれて、寒気がした。

必要とされているのは、あたしの証言。

（正直に言ったほうがいいの？）

それともロディナには、なにか作戦があるのか。

脱出の相談はできていたけど、こんな相談はしなかった。

（どうすれば——）

横目でもう一度だけ、ロディナを見た。

——多分それが、ロディナの作戦だったんだろう。

音もなく、動いた口もと。

それが形づくっていたのは、まぎれもなくあたしにも覚えがあるもので。

（そっか）

ロディナが書いた魔符は、本当にこいつらが望んだものじゃなくて——

さっきロディナが演じていたように、あたしも演じてみようと思いをひらいた。

「……そうよ、確かにロディナは字が下手なの。そのせいで卒業論文を突き返されたくらいね」

「ちよつと、そこまでばらすことないでしょ!？」

入ったロディナのあいの手も完璧だ。——もしかしたら、かなり本気で言ったかもしれないけど。

あたしはもつともらしく、すぐにフォローする。

「でも優秀なのも本当よ。そもそも論文の提出が許されるのは、成績上位五名だけだもの」

「——だそうだ」

大男が最後をしめると、エムルくんの隣にいるひとりだけやけに身なりのいい男は深く頷いた。

（あいつが首謀者なの?）

歳は四十前後だろうか、周りの男たちよりも明らかに上で、立ち姿にもどこか気品が見える。

「ではエムル」トルド、この魔符にハンコを捺してもらおうか」

その男は落ちついた声音で、エムルくに魔符を差し出した。

（あれがロディナの書いた魔符ね）

しかしエムルくんは椅子に拘束されていて、手も肘掛けに縛られた状態だった。当然魔符を受け取れるはずも、ハンコを捺せるはずもない。

そこで男は魔符をエムルくんの左手と肘掛けのあいだに挟みこみ、エムルくんの左手の親指から無理やりハンコを取り出した。

（強引に捺す気?）

その瞬間に備えてか、ロディナのそばの男がロディナの口を手で塞ぐ。ハンコが捺されたとき、万が一にでも唱えられることを恐れたんだろう。

——だけどそれが、あなたたちの敗因よ!

ハンコが捺された魔符は一瞬、淡い緑色の光に包まれあたしたちの目を攻撃してくる。

みんなが目をつむった、今がチャンス!

「アオマ・クラエネブレバノーアピっ！！（魔符術・金だらいよ、その高貴なる姿で敵を押しつぶせっ！！）」

そう、ロディナが誰にも聞こえない声で呟いたのは『金だらい』だったんだ。そしてその魔符が最後までばれなかったのは、ロディナが書いたものだったから！

あたしが唱えた瞬間に光と魔符は消え失せ、かわりのように訪れる、魔符術の効果。

「！？ な、なんだっ？ 今船になにかがぶつかったような衝撃がしたぞ！？」

「ぶつかったというか、落ちてきたんじゃないか？」

揺れた衝撃に、焦りはじめる男たち。

「お、おいっ、窓を見ろ！ 高度が落ちてきてるぞ！！」

「なんだって！？」

（ちよ、そこまでの威力はこっちも予想外だよ！？）

まさかこの飛行船を沈めてしまうほど大きな金だらいが落ちてきたとも言っのだろうか。それほど、このエムルくんの力が強いということ？ これくらいそばにいても、エイラさんみたいな圧力はなんにも感じられないのに――

「リユーイールンっ、ぼーっとしてないでエムルトルドを！」

ロディナに声をかけられて、はっと我に返った。

男たちはみんな飛行船から逃げることに精一杯なようで、部屋の出入り口に殺到していたんだ。おそらくどこかに脱出するための乗りものがあるんだろう。あたしを捕まえていた男も、いつの間にかいなくなっていた。

あたしはロディナに言われたとおりエムルくんのほうへと駆け寄り、身体を椅子に縛りつけているロープを外してやる。ついでに口を塞いでいる装置も。

「大丈夫っ？ エムルくん」

「あ、ありがど、おねえちゃん」

「無理やりハンコ出されてたみたいだけど、手は平気なの？」

「ん、もどもど外れるようになってらして」

幼い声で繰り返されるなまりがなんともかわいくて、思わず喜んでしまいそうになるけど、今はそれどころじゃない。

そうこうしているうちに、飛行船も傾きはじめた。

「ちょ、ちょ、ちょ、斜めってるよおおおっ」

「落ちつきなさいよ、リユーイールンっ。とりあえずこっちにきて」

こういうときは、冷静な声をかけてくれるロディナの存在が本当にありがたい。ただ、ロディナはその場で身体を起こしていたものの、まだ立てないようで手招きをしていた。

あたしは両手でエムルくんを抱えこみ、ふらふらになりながらもそちらに戻る。

するとロディナは、手もとに一枚の魔符を用意していた。

（！ そうだ、脱出用の魔符は書いてあったんだった）

それにハンコを捺してもらえれば、無事に帰るのは簡単なことだ。「エムル」トルド、この魔符にハンコを捺してもらえないかしら？」

ロディナに渡され、目を落としたエムルくんは、こんな状況なのにケラケラと笑い出す。

「これ、おもしれえ魔符だなあ。おねえちゃんだちが考えたの？」

「そうよ！ 結構な自信作なんだから」

答えたあたしに、しかしエムルくんは。

「でも、捺されねえな。だってこれだば、この船そのまま落ちでしまっべ？」

「え？」

「街にが森にがは知らねえけど、被害は出るべき。んだして、まずそればくいとめねえと」

「でもそんなこと言ってる場合じゃ……きやああっ」

飛行船はさらに高度を落とし、落ちる速度も速まってきた。これでは助けるのも助かるのも余裕がない。

ただわかるのは、魔力士の協力がなければどうにもできないとい

うこと。

「どうしようロディナ!? この飛行船を消す魔符でも考えてみるっ?」

そんな時間があるとは到底思えなかったけど、すぐのような気持ちで口にした。

すると、なにかを考えるようにずっと押し黙っていたロディナが。
「――! 飛行船を、消す……? そうよね、それだけでいいのかわ!」

「え? なに? いいこと思いついたっ?」

「リユーイルーン! 今すぐこの魔符の内容を床に書き写して!」
「!?!」

それはあまりにも盲点を突いた方法だった。

「すごい……すごいよロディナ!」

魔符を織る対象はなんでもいい。

ただし、魔符術を使用したさいにその対象は消え失せる。

それならこの飛行船本体を魔符にしてしまえばいい!

「褒めなくていいから早くっ!」

「まかせて!!」

ペンは念のため勝手に持ってきていたから、それを取り出して床に書き写す。

その方法にはエムルくんも納得したのか、ハンコを出して待っていてくれた。

(うっ、床が傾きすぎて書きにくいよ!)

気を抜くと転がってしまいそうだったから、なんとかこらえて踏んばる。転がってくる木箱やタルは、ロディナがふらふらになりながらも抑えてくれたから平気だった。

「よしできた!」

「あい、だば捺す!」

今度は目の前で、さっきと同じ白緑の光が。

(やっぱりエムルくん、もしかしてかなり力が強い!?)

それがガイト以上に強い光で、まるでそのなかに身体が消えていきそうな錯覚すら抱かせる。他国のやつらが狙っていたことといい、エルムくんきみ、本当は――

「唱えるわよ、リユーイールーン！」

「は、はいっ」

光のなか、三人で硬く手を繋ぎ、ロディナの合図で声をそろえた。「アオマ・ダンアイパツエアジェー！」（魔符術・しゃぼん玉よ、我らを包みて宙に舞え！！）

そうして再び光に包まれる世界。

まぶしすぎてなにも見えないから、互いの手だけをきつく握った。（お願い、うまくいって！）

理論上はうまくいくはずだったけど、これまでにこんな大きな媒体で魔符術を行ったことはないから。誰も試さなかったからわからなかっただけで、大きさの限界がもしかしたらあるかもしれないんだ。

祈るしかなかった。

ロディナの紡いだ古代語を信じて――。

あたしはこの魔符を織りこんだときのことを思い出す。

『ねえリユーイールーン。しゃぼん玉の古代語はわかる？』

もう一枚魔符を織ろうと言ってきたロディナに、訊かれたときは驚いたものだ。

大人びたロディナに『しゃぼん玉』なんて似合わないような気がしたから。

多分、そういう考えが顔に出ていたんだろう、ロディナは苦笑して。

『きょうだいのために、いろいろなものを我慢するしかなかったわたしはね。妹たちが無邪気に飛ばすしゃぼん玉を見て、あれに乗って自由に飛んでいたらいいのにつて、いつも思っていたの。……わたしは、気づいていなかったから。家族を守りたい、でも逃げ出したいと思う自分の心と対峙することで精一杯だった。家族もまた、

さみしさからわたしを守ってくれていたことに、気づかなかった』

『ロディナ……』

『だから今、生きて家族のそばへ戻るために、それに乗りたいたいと思うの。おそらく下は丸見えだろうから、あなたは怖いかもしれないけれど』

『こ、怖いだろうけど、きつと平気！ えつとね、しゃぼん玉のつづりは——』

（——うん、こんなにやさしい想いで紡がれた魔符に、間違いないよね！）

やっと落ちついてきた目蓋の向こうの明るさに、あたしはそつと目をひらいた。

まず見えたのは、虹色の輝き。

そしてそれを通り越して見える、あたしたちの大切な国。

きよるきよると一周見渡してみたけど、飛行船が落ちて炎上しているようなところはひとつもなかった。

「成功よ、リユーイールン」

「よ、良かったあ」

あたしは全身から脱力した。不思議と、空の上にいるという怖さはなかった。

虹色に輝く大きなしゃぼん玉は、ちゃんとあたしたちを守ってくれている。それに、いくつか見えるパラシュートみたいなのは、きつと誘拐犯たちのものだろう。いくら悪人とはいえ、死なれたら後味が悪いし、殺したかったわけじゃないから助かってくれたほうがいい。

（こういうの、偽善的っていうのかもしれないけど）

あのガイト＝チャードだって気遣ってくれたことだ、きつと悪いことじゃない。

どんな人だって、いなくなったらかなしむ人がいるかもしれない。あたしにはわからないだけで、他人には見えないだけで、どうにもできない理由を背負っているかもしれないんだ。

ひよんなことからロディナと一緒に旅をして、あたしはそれを読んだ。

人のうわべしか見ないのは、愚かなことだ――。

「わたしの下手な古代文字が、初めて役に立ったわ」

なんとなく目があったら、苦笑を浮かべたロディナが呟く。

「ありがど！ おねえちゃんだぢっ」

するとあたしたちふたりを捕まえるように手を広げて、エムルくんが抱きついてきた。見た目は九歳くらいだけど、寿命の長い魔力士だ、もしかしたらあたしたちよりも長い時間を生きているのかもしれない。

（自分の身の安全より、飛行船が落ちたときの被害を心配してた）

この子は間違いなく、国を守る立派な魔力士だ。

思わずぎゅっと、その小さな肩を抱きしめる。

「おねえちゃん……？」

「エムルくんって、ほんとはかなり強い魔力を持つてるの？」

「――」

訊いてみたら、エムルくんは一瞬だけ下を向いて息を呑み、それでもすぐに戻して。

「おら、魔力強すぎで、ずっとひとりだった。だあれも寄れねくてここよりずっと南のほうさいだけど、そこの国さはおらの魔力を抑えられる人、だあれもいねがった」

「それで、この国に連れてこられたの？」

問いかけたロディナに、エムルくんはぶんぶんと首を振る。

「連れてこられたんじゃないね。ガイドが迎えに来てくれたして、おら、自分の意思でここに来てんだ」

「え――」

思いもよらない名前が出てきて、今度はあたしが息を呑む番だった。

（なんでガイドが？）

あいつだっけとあの屋敷のなかに閉じこめられてるんじゃない……

「ガイトは、おらがもうちょつと成長して、自分で自分の魔力をある程度制御できるようになるまでは、おらの力を封印しておいでけるって言って、この首輪ばつけてくれた」

言いながら、エムルくんが服の下から出したのは、光でつくられた輪だ。おそらくこれも魔符術。それも、かなり高度な。ガイトの命令で誰かがつくったのだろう。

「だからエムルくんは、そばにいても平気なんだ。魔力士特有の圧力みたいな、感じないもんね」

コクリと頷く姿はかわいくて、そのへんにいる子どもそのものなのに、それほどまでに強い魔力を有しているとは。

「だけどさ、みんなしておらの魔力怖がって、結局誰も近寄ってこねがったよ。ハンコの威力は抑えられねえして、ハンコ擦すのも禁止されだら、おらますますひとりだ」

「！ あの×マークって、そういう意味だったんだ……」

（エイラさんも、エムルくんは事情があってハンコを擦せないって言うってたっけ）

身体から漏れる魔力は抑えられても、ハンコを通して体内から届けられる魔力までは抑えられなかったんだ。

「ガイトだって、ガイト自身がひとりにされでるような状態だったして、会いには来てくれねがったけど……かわりにいつも手紙送ってくれた」

「手紙っ？ へえ、意外なところもあるのね」

ロディナは心から驚いたように告げたけど、あたしはどこか納得してしまう部分があった。

（そっか……そうなんだ）

ガイトはひとりでいることのさみしさを知っていたから。

どうやってエムルくんのことを知ったのかはわからないけど、きつと放っておけなかったんだろう。

だけど自分だってそばにいてやることはできなくて。

歯がゆい思いを、していたのかもしれない。

「んでな？ こないだ来た手紙に、近々変なおねえちゃんがふたり
おらを尋ねてきてくれるがもしれねえって書いてあったして、待つ
てたんだ。それっておねえちゃんだぢのことだべ？」

「！？ じ、じゃあもしかして、エイラさんがとめなかったのって
……」

（行くなら行ってみればいいと、あたしたちを送り出したのも）
「ガイドが指示してたから！？」

「ふーん、結構な策士なこと」

目を細めて感心しているロディナだけど、その目に少しの鋭さも
見えるのは、利用されたことを怒っているからだろうか。

「――！ あつ、あれ、アステイスの飛行船だっ」

「えっ？」

あたしたちに抱きついているため、ひとりだけ反対側を向いてい
たエムルくんが大きな声を出した。振り返って見ると確かに、この
国の紋章が刻まれた飛行船がこちらに向かって飛んできている。

（た、助かった……）

このままずっとしゃぼん玉でふわふわしていたら、さすがに冷静
ではいらなかったかもしれない。

「おそらく、だけどねリユーイルーン」

「ん？」

笑いを含んだ声音で告げたロディナに目をやると、ロディナはな
ぜか口もとをおさえていて。

「また幼なじみくんに感謝しないといけないみたいよ」

本気で笑っているのだった。

「あー……覚悟しとく！」

【第4章】いちばん強い魔符術 - 1

お城での発表大会を翌日に控えた今日、あたしたちはエムルくんの屋敷で最後の作戦会議をしていた。丸いテーブルを囲んで、優雅に紅茶を飲みながらゆっくりと思考できるなんて大変ありがたいことだけど、ひとつ問題だったのは――

「あのー、エムルくん？ ちょっと言いにくいんだけど、砂糖と塩間違えてないかな？」

「んだべがつ？」

「いろいろとやってもらえるのはありがたいのだけど、できればじつとしていてちょうだい」

「ぬぬう」

屋敷のなかに人がいることが嬉しいらしく、いろいろと世話を焼いてくれようとするんだけど、ロディナの言うとおり今はおとなしくしていてくれたほうがありがたかった。なにしろ、あたしたちの魔符づくりはまた振り出しに戻ってしまったのだから。

「エムルくん、良い魔符が完成したらちゃんと遊んであげるからさ」
シュンと下を向いてしまった頭をなでてやると、それでも元気を取り戻して部屋を出ていく。その残像に花が舞っているように見え
たのは、あたしの気のせいではないだろう。

（ほんとに嬉しいんだろうなあ）

そしてそれだけ、よっぽどさみしい思いをしていたということだ。
（あの子がナイト以上に強い魔力を持つてるなんて、全然信じられないけど）

あたしたちが国王陛下直属の飛行船に助けられたあと、詳しい話を教えてもらえたんだ。

エムルくんがこの国に来ることになった理由は、本人が言っていたとおり魔力が強くなりすぎたからだ。南のイーサリ力では手に負えなくなつて、優秀な魔力士や言語学者のいるこのアステイス

王国に助けを求めてきたのだという。しかし当然、高位の魔力士を欲しがっている国はたくさんあって。だからこそ魔力を封印され誰でも近寄れる状態のエムルくんを、狙う者がたくさん出てきた。（それさえなければ、エムルくんは一時的にでも普通に暮らせたかもしれないのに）

完璧に守る必要があったから、力がなくとも結局は隔離されることになり。いつもは過剰なほどの警備で守られていたけど、ここ数日は特別に少し緩くなっていた。

それはガイトが、エムルくんに書き送った手紙のせいだ。あたしたちが来るかもしれないと知ったエムルくんが、無理を言って減らしたらしい。あまりに厳重な警備だと、あたしたちがびっくりして近寄らないかもしれないからって。

しかし他国のやつらには逆にそこを狙われ、今回の誘拐事件が起きてしまったのだった。

「でも良かったわね、とりあえず『最強のハンコ』をもらう権利は得られたもの」

淡い花柄のティーカップを口もとに運びながら、改めてロディナがほっとしたように呟く。その眉間には思い切り深いシワが刻まれていたけど、見なかったことにしよう。

「問題は、そのハンコが最強すぎてめったな魔符はつくれないってことよね……」

そう、エムルくんを無事に助け出したあたしたちは、特別にエムルくんのハンコをもらえる権利を得ていた。ただし条件がひとつあって、エムルくん自身が捺してもいいと思えるような魔符でなければ、捺してもらえないんだ。

あたしも塩からい紅茶を飲みながら、ない頭を働かせる。

「まず攻撃魔符はともじやないけど無理でしょ？　こことお城とじゃ距離が近すぎるもの、本当に死人が出ちゃうよ」

ガイトのハンコで一マスずれでもあの威力だった。エムルくんのハンコがそれ以上の威力をもたらすことは確定事項なのだから、無

茶はできない。

「そうよねえ」

いつもならすぐに案を出してくれるロディナも、今回はかりは思い浮かばないのか視線は宙を舞っていた。

（『いちばん強い魔符術』で、かつ、攻撃的なものでないとなると――）

あたしにとつて、いちばん強いものってなんだろう？

そもそも、強いってなに？

どういうこと？

「おねえちゃんだづつ、なんかジノラットって人が来てらんだけど、入れてもいいの？」

考えるあたしを遮断するように、さつきエムルくんが出ていった扉の向こうから声がした。この屋敷にはエムルくん以外の人はいないから、当然エムルくんものだ。そうじゃなくても、独特のなまりは他の人には出せないだろうからすぐにわかるけど。

ロディナに目を向けると、「いいわよ」というふうに軽く頷いたから、あたしは椅子から立ちあがって扉のところへ向かう。そしてあけてやると、門番のようにかしこまって立っているエムルくんの姿があった。

「入ってきたっていいのに」

その姿があんまりかわいくて、笑って言ったら。

「おら、行儀の良い子さなりてえして。『入って』って言われでがら、入るんだ」

（さみしいから、誰にも嫌われたくないって？）

小さい姿に、研ぎ澄まされた心が痛い。

「じゃあ、ジノラットを連れてきてくれるかな？」

「あいつ、行ってくるだ！」

敬礼するようにびしっとひたいに手をあてて、それからくると方向転換すると楽しそうに走りはじめた。やっぱり残り花が見える。（ま、本人が楽しんでるならいいか）

テーブルに戻ると、珍しくロディナが穏やかな笑みを浮かべていた。

「うちの弟たちも、軍隊ごっこみたいの好きなのよね。今度連れてきてあげようかしら」

「それいいよ！ 絶対喜ぶから」

そこからは一時考えるのをやめて、ジノラットの到着を待った。ジノラットが来ると騒がしくなるのは必至だけど、その分閃きも生まれる。金だらいの魔符を思いつけたのはジノラットのおかげだったし、なにより昔から一緒にいるからなんとなく落ちつく、という側面もあった。あたしにとってはある意味、両親の次に家族みたいな存在だ。

（あたしたちが誘拐に巻きこまれたって、国に通報してくれたのやっぱりジノラットだったし）

ロディナがそう予想していたとおり、ジノラットは相変わらずあたしたちのあとを追っていて。あたしたちが眠らされてから現場にたどりついたものの、魔符術戦では勝てずに逃してしまった、という話だった。ジノラットがどんなに魔符術戦に慣れていると言っても、やはり大人と子どもの差は大きい。こないだみたいに逃げるための戦いならまだしも、本気で勝とうとするのはさすがにきつんだろう。

「どうだ？ 良い魔符思いついたか？」

部屋に来るなり尋ねたジノラットの表情が、珍しく沈みきっているのは。

「あんたと同じで、まだなにも考えついてないよ」

「そ、そうか……でもおまえたちはこいつのハンコがある分有利だよなあ」

ジノラットがいている椅子に座ると、エムルくんがすかさずデーカーカップを運んでくる。

「お、ありがとな」

さっと手を伸ばして受け取り、口に運ぶジノラット。

「一応忠告しておくけど――」

「ん？」

声をかけたロディナのほうを見る、ジノラットの動きがまだぎこちない。あたしがロディナと一緒にいるせいで、以前に比べてずつと接する機会が増えたのに、一向に慣れないようだ。

「なにが入っているか、わからないわよ」

ロディナが続きを告げたとたんに、ジノラットは「うげえ」と紅茶を吐き出す。

「ちょ、こっちに向かって吐かないでよ！」

「ロディナに向かって吐くわけにいかないだろ！　つかこれ、なに？　なに入ってるんだ！？」

みんなの視線がトレイで顔を隠すようにしているエムルくんに注がれる。

エムルくんはそつと目だけ見えるようにずらして。

「えつと……おらにもなんだがわがんね……」

「わかんねえものを入れるなよーっ！」

きつと砂糖が見つけれなかったんだろう。

ジノラットに怒鳴られて、ぴゅーんとすごい勢いでエムルくんが部屋を出ていった。それでもやっぱり花が見える気がするのは、こういうことすらも楽しんでいるからなのかもしれない。

（誰も怒ってなんかくれなかったんだろうな）

エムルくんは国の未来を担う大事な存在なのだと、理解している人ばかりがそばにいたら。きつと誰も叱れないし、手出しなんかできない。それはエムルくんにとって、どんなにかつまらないことだったろう。

ジノラットがそこまで理解して行動しているのかは、わからないけど。

「ジノラット。怒るのもいいけど、あとでちゃんと遊んであげなさいよ」

「ええっ？　俺、子どもそんなに好きじゃないんだ。おまえのせい

で子どもに対するトラウマがいっぱいあってだな……」

「あら、人のせいにする気？　だいいち、あたしが子どもの頃ならあんたも子どもじゃないのさ」

ジノラットをなだめながら、ロディナに視線を送ってみる。ジノラットを簡単に操るには、ロディナに協力してもらうのがいちばんなんだ。

ロディナも当然そのことに気づいているのか、あたしの視線を受けとめると軽く頷いて。

「ジノラット」ダクシャン、わたしからもお願いするわ。今度わたしのきょうだいもここに連れてこようと思うの。良かったら一緒に遊んでやってくれない？　女のわたしじゃつきあえることに限度があつてね」

まるで女神が降臨したような、改心の笑みだった。

（うわぁ……ロディナ本気出しすぎ！）

すっかりあたしまで惚れそうになった。やばいやばい。

当然ジノラットなんかイチコロで、目の前で大きく両手を振っていた。

「いつ、今の嘘！　子どもが嫌いってのはそう、言葉のアヤで、嫌いなのはリユーイだけだから！　喜んで遊ばせていただきますっ！」

（……なんか腹立つけど、まあいっか）

ジノラットにとっては、ロディナの笑顔がいちばん強いものなんだ。

「——！」

そう考えたあたしは、ピンときた。きてしまった。

思わず椅子から立ちあがる。

（いちばん、強いもの……？）

それは誰にもダメージを与えない、ただ胸のなかをあたためるためのもの。

すべての人が心のどこかに抱える、本人も気づかないかもしれない想いを。

そつと癒すための、言葉すらいらぬ不思議な力。

「？ どうしたのよ、リユーイルーン」

不思議そうにあたしを見あげるロディナの胸もとに、一度はあたしに託したペンダントが見えた。

（そう、ロディナだって、そうだよな）

あのあと話を聞いてみたら、やっぱりロディナは幼い頃にあたしの両親と出会っていて。まだ他のきょうだいが小さくて、ロディナだけが自由に動けた頃、父親に連れられて飛行船の初飛行記念式典を見にいったのだという。そしてたった一度きりのわがまを言ったんだ。

『あの飛行船に乘りたい』

ところが当然そんなお金はなく、父親は必死に娘をなだめていた。そこに声をかけたのが、あたしの両親だったという。

（あのとき、あたしは熱を出していけなかったのよね）

だからもともと席はひとつ空いていた。

あたしの両親はあたしのかわりにロディナを連れて飛行船に乗り、ロディナといろいろな話をしたんだって。

『どうすればこういう船に乗れるの？』

『どうすればお金持ちになれるの？』

『どうすれば、家族のみんなが幸せになれるの？』

他の大人が聞いたら適当な返事に逃げてしまふようなことでも、丁寧にわかりやすく答えてくれて嬉しかったんだと、ロディナは言っていた。

実父をさしおいてあたしの両親と撮った写真が、なによりの宝物になってしまったんだ。

その写真から、まっすぐに向けられる笑顔が。

「——ロディナ、思いついたよ！ 世界で『いちばん強い魔符術』
！！」

「えっ？」

「本当か!？」

「うんっ。さあ、卒業を勝ち取りにいきましょう！」

【第4章】いちばん強い魔符術 - 2

発表大会の会場は、お城に併設されている円形闘技場だった。

「普段はここで武術大会やってるんだよね？」

受付で入場許可をもらい、円形闘技場の入り口へと足を運びながら、詳しくそのロディナに振ってみる。

「ええ、そうよ。いくら魔符術が便利なものといっても、魔符を読む前に攻撃されたのではひとたまりもないもの。だから強い魔力士や良い魔符術士だけではなくて、強い武術士も必要なの」

それを見極めるための大会が、一年を通して開催されている。

その会場でこれから始まるのは、『いちばん強い魔符術』を決める発表大会――

（やっぱりそれって、エルバティン王国を意識してるんだろうな）

西にあるその大国は、このアスティス王国をかなり狙っていると聞く。国一の魔力士であるガイトが西寄りに置かれているのも、そのせいだとロディナが言っていた。

（国王陛下は、この国を守るために強い者を求めている）

でも、国を守るのは本当に強い者だけなんだろうか――？

そんなことを考えながら、あたしはあたりを見まわした。

受付のあった門から会場までは、あたしの足で百歩くらいだろうか。そのあいだには多くの大人たちがひしめきあっていたけど、きくと彼らはすでに発表を終えた人たちだ。

（全員が集まっていつせいに発表をするわけじゃないって、言ってたもんね）

『いちばん強い魔符術』と思われるものをその場で実行するのだから、当然危険が伴う。だから今回は、発表をする者がひとりずつ入っていった、会場の中央でそれを披露するという形が取られていた。当然受付のタイミングも人により違い、あたしたちが来たときは他の発表者がいなかったから、そのまま会場に入っていいと言わ

れたんだ。

「先に言っておくけどリユースフルン。あなた、会場に入ったら勝手に奇声をあげるのはやめてちょうだいね」

迷わないようにとレンガが敷きつめられた道を歩きながら、不意にロディナが口をひらいてきたから、あたしは顔を向けて。

「いい加減フルネームで呼ぶのはやめてよ、ロディナ。あと、奇声つてなに？」

「『うわあああ、すっごい豪華！ めっちゃ広いっ！』とか、そんなの」

「……………」

あまりに言いそうで、しかも似ていて、言い返せなかった。

（いいもん、目をつむって入るから！）

視界の先にたくさんの花で飾りつけられたアーチが見えてきて、あたしはそう決心する。左手を伸ばしてロディナの右手に重ねると、自分の行く先を委ねた。

「なに？」

驚いたような声音のロディナに、

「恥ずかしい思いをしたくないなら、なかまで連れてってよ！」

「……………しょうがないわね」

ロディナはため息にその言葉をのせたけど、きつと顔には苦笑を浮かべているんだろう。口で言うほど本気で思っているわけじゃないことを、あたしはもう知っている。

それを肯定するかのように、ぎゅっとあたしの手を握り返してきたロディナ。お互いの緊張が、手のひらを通して行ったり来たりする。

でも足は、とまらない。

（あたしたちは卒業するために来たんだ）

ここで怖じ気づくわけにはいかなかった。

ひたすら、転ばないようにと足もとに集中して歩く。

やがてコツコツというレンガから、音のない土へと変わったその

とき、聞こえてきたのはひととき大きな声の紹介だった。

「おおっと！？ 今度はふたりの少女がやってまいりました！ どうやら今回の最年少で、現役魔符術学校生のロディナ・ルーンとリユー・イルーンのお二人です！！」

それに反応するように、四方からわきあがる歓声。

（な、なに！？ 一体どうなってるのっ？）

目をあけたかったけど、あけてしまったらそれ以上進めないような気がして、ためらう。

ロディナもさすがに驚いたのか一度足をとめたものの、

「——行くわよ」

冷静に心を落ちつけると、いつもの凜とした声音であたしを導いてくれた。

「う、うんっ」

手を繋いで歩く制服姿のあたしたちはきつと、いちばんこの会場に似合わない存在かもしれない。

それでも——ファイルブックのなかに携えてきた魔符には、誰よりも自信があった。

近くに魔力士がいるわけでもないのに、全身に感じる強い視線の圧力を掻き分けて、探るような足取りで中央に向かっていく。やがてたどりついたんだろう、先に足をとめたロディナがあたしの耳もとで囁いた。

「さありユー・イルーン。あの魔符を」

あたしはまだ目をつむったまま、手探りで左肩から斜めに提げたファイルブックを取り出す。今日このなかに入っている魔符は、たった一枚だけだ。間違うことはない。

「いい加減目をあけなさいよ。大丈夫、魔符だけを見ていればいいのだから」

「わ、わかった」

ロディナに促されて、あたしはやっと目をあけた。

でも、魔符だけ見るのはさすがに無理だった。あたしの身体はち

やんと観覧席にいる国王陛下のほうを向いていて、ばっちり視界に入ってしまったから――

『おぬしの両親を、まだ見つけてやれなくてすまないな』

エムルくんの誘拐に巻きこまれた数日前、お城で感謝とともに告げられた言葉を思い出す。

（陛下はまだ、あたしの両親を捜してくれている）

他の誰よりも、あたしにとって強い威力を持つふたりを。

たとえそばにいらなくても、いくらでもあたしを支えてくれる、笑顔。

「リユーイルーン、心の準備はいい？ 読みあげるわよ」

まだ手は繋いだまま、残りの手で互いに魔符を挟んで。

促したロディナにあたしは大きく頷いた。

そして「せーのっ」のかわりに大きく息を吸い、声をそろえる。

「アオマ・イツセンイットオーインピーウイスマッ！！（魔符術・

笑顔よ、すべての大切な者へ届けっ！！）」

（本当は）

心に思ったことをそのまま綴ったら、魔符におさまらないくらいになってしまった。

それをここまで短くできたのは、まぎれもなくロディナのおかげだった。

あたしたちの最後の共同作業、その結晶はこれ以上ないほどに光り輝き、会場を包みこむ。周囲のすべてが見えなくなり、やがて自分だけが残った。

隣にいるはずの、まだ手を繋いでいるロディナさえ見えない。

（な、なにこれ！？）

効果が強すぎる、ような気がした。

実際に試したことはないし、エムルくんの力ならこれが普通なのかもしれないけど。

光が強すぎて、とてもじゃないけど目をあけていられない。

かといって目をつむっていても、目蓋の上から透き通る光で闇は

訪れない。

「——！！」

そんななか、見えるはずのないものが見えた。

ギヒシー（パパ）が立っている。

バートチャ（ママ）が立っている。

夢よりもずっとリアルな笑顔で、あたしに手を振っていた。

その後ろにはジノラットやロディナが。

一緒に勉強してきたクラスメイトたちが。

みんなあたしに笑顔を向けていた。

（だからきつと、あたしも笑顔だ）

自然にわきあがる笑顔は反射する。

大切な人の笑顔を思い浮かべて、沈む人なんかいない。

一歩踏み出す勇気になる。

手を休めて、なぜ自分はここにいいのかと、考えるきっかけにもなる。

（これは、攻撃するための魔符術じゃない）

誰かを守るための魔符術でもない。

ただ我に返るための。

自分の存在を確認するための魔符術。

笑顔の強さを実感するためだけの、魔符術。

（あたしはそれがいちばん強いものだと思ったんだ）

そしてロディナも賛成してくれたから、この魔符術が生まれた。

この、『いちばん強くてやさしい魔符術』が——。

やがて静かに光が消え去ったとき、魔符のかわりに残ったのは、意外にも。

「！？ エムルくんっ？」

本来ならばここにいないはずのない、ハンコを捺してくれた本人だった。

（ど、どうりでなんか威力が強かったはずだよ！）

境界をひとつも隔てていない以上、ほぼ百パーセントの力が発揮

されたということ。そのせいなのか、さっきまでのざわめきが嘘のように、会場はしんと静まりかえっていた。

「おらね、ちゃんとおねえちゃんだぢの顔浮かんだよ。あど、ガイトの顔も！ ついでにジノラットにいちゃんも」

恥ずかしそうに、でも嬉しそうに、はにかんだ笑顔を見せたエムルくんが抱きついてくる。

あたしはそれをしゃがんで抱きとめてから、観覧席にいる国王陛下のほうに目をやった。

（エムルくんはいずれ国を背負わなきゃならない魔力士なのに、自由に出歩いているなんて）

陛下が知ったら怒るかもしれないと、思ったんだ。

「——え？」

しかし視線の先の陛下はひどく穏やかな表情をして、こちらを眺めていた。

にわかにはざわめきを取り戻した場内だったけど、陛下がずっと立ちあがるとまた静けさを取り戻す。

「こちらへ」

結構な距離があるにも関わらず、ちゃんと声が届いたのはそのおかげだった。

ロディナに顔を向けると力強く頷いてくれたから、今度はあいだにエムルくんを挟んで手を繋ぐと、観覧席のほうへと向かって歩き出す。

（なにを言われるんだろ……）

不安がないわけじゃない。

だってきつと、あたしたちが出した答えは陛下が望んだものとは違うはずだ。

繋ぐ手のひらにも、汗がにじむ。

「おらのごとなら、心配いらねえべ。ガイドが陛下のおっちゃんば説得してくれだして、外さ出られたのさ」

それがエムルくんにもわかったのか、一生懸命にこちらを見あげ

て教えてくれた。

「ガイトが――」

「腹の立つ相手ではあるけれど、良いところもあるのね」

「あははっ」

ロディナの率直な感想に、エムルくんが笑った。

おかげで気持ち落ちついてきた。

やがてたどりついた、国王陛下のまん前。

陛下もわざわざ下のほうまでおりてきてくれていた。

すでにまっ白になっている髪を後ろになでつけ、聡明さを讃えた瞳で静かにこちらを見据え、

「――良い、魔符術だった」

シワの多いその口もとが、ゆっくりと動く。

「いちばん大切なことを、思い出させてもらったよ。ガイトの言ったとおり、おぬしらは面白いな」

そうしてくしゃりと、笑った。

笑ってくれた。

とたんにあたりも色めき立つ。

（こ、これは認めてもらえたと思っていいの！？）

一度は去った緊張が、再びよみがえる。

視線は陛下に集中するけど、しかしその陛下の視線がなぜか少しさがり。

「エムルよ」

「んん？」

今度はあたしたちではなくエムルくんに話しかけた。

「そのふたりの願いごとを聞いてきなさい」

「――」

（やっぱりそうだ！）

陛下はあたしたちの願いを叶えてくれる気があるらしい。おまけに、願いごとを人に聞かれない配慮までしてくれている。おそらく魔符術学校にチラシを貼った時点で、こういう願いごとが来るかも

しれないことを予想していたんだろう。

「リユーイールン、お先にどうぞ」

ロディナも嬉しさを隠しきれない声音で、それでもあたしに先を譲ってくれた。

「ありがと！」

それがロディナのプライドだとわかっていているから、あたしは遠慮なくしゃがみこんでエムルくんの耳もとで願いごとを囁いた。

（何度も、考えたの）

あたしが本当に叶えたいことってなんだろう？

自分の卒業はもちろんだけど、他にもあるんじゃないかって。

両親の帰還を願いごとにできないことはとくにわかっていた。

一国の王さまに叶えられる範囲のことではなければいけないから。

だからあたしは、これを選んだんだ。

あたしのあとにロディナも囁いて、エムルくんは「うんうん」と聞いていた。

（ロディナはなにを願うのかな？）

やっぱり自分の卒業？

それともロディナも、新しい願いを見つけられたかな。

さつきまでとは違う意味で、緊張する。

やがてふたつの願いごとを聞きおえたエムルくんが、あたしたちを交互に見比べてにんまりと笑った。

（えっ？）

今のはどういう意味だろう？

それからあたしたちの手を離れて、陛下のもとへと走ってゆく。

陛下は意外にも力強くエムルくんを抱えあげると、耳もとに近づけて――

「……はっはっは」

聞いたとたんになぜか笑いはじめた。

（あ、あれ？）

なにか変なこと言ったっけ？

もしかしたらエムルくんが変に脚色して告げたんだろうか？

ロディナも戸惑ったように顔をしかめていた。

「リユーイーールン、あなたまさかバカなことを願ったんじゃないでしょうね？」

「バ——ロディナから見たらバカなことかもしれないけど、あたしにとつては重要なことよつ。ロディナこそ、似合わないこと言ったんじゃないの！？」

気持ちが高ぶっているせいか、言い返してみたらロディナは珍しく。

「……そうね、らしくない、かもしれないわね」

否定をせずに、口もとだけで笑った。

「？ なんなのよ……」

みんな気になる反応をしている。

この空間は、どこか変だ。

「よろしい。結果はあとで学校のほうに届けさせよう」

国王陛下は一方的にそう終えると、またもとの席へと戻ってしまった。

（え？ えっ？）

あたしたちも、係りの人に促されて会場をあとにする。

「なんなのよ、このモヤモヤ感は！」

出口で改めて口にしたけど、やっぱりなにも変わらずに。

こうしてあたしたちの発表大会は、なんとも言えない嬉しさと微妙感を残して終わってしまったのだった——。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3721z/>

ハンコくださいっ！

2011年12月24日13時53分発行